



目 次

聖訓摘要	……	野口	生	日	上	人
本尊講章	……	野口	生	日	上	人
日蓮教學講座(第十七回)	……	野口	生	日	上	人
實在の根本原理(其二)	……	野口	生	日	上	人
人生と法華經	……	野口	生	日	上	人
非滅現滅の夕	……	野口	生	日	上	人
歌詠	……	野口	生	日	上	人
法華經講話(第十五講)	……	野口	生	日	上	人
記事	……	野口	生	日	上	人
○各地教信	○寄附團費誌料領收					

財團統一團趣意
法人統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ウテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラシム事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シ
テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ
理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」
ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ
ラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五
圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金
貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員
トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ
無料ニテ頒布シ團章壹圓ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

上野殿御返事

日生上人

又日蓮が弟子等の中に、なかなか法門知りたり氣に候ふ人は惡しく候ふげに候。南無妙法蓮華
經と申すは法華經の中の肝心、人の中の神の如し、此れに物をならぶれば、后のならば二王をお
とことし、乃至后の大臣已下に内々嫁くが如し、災禍の源なり。正法像法には此の法門を弘めず、
餘經を失はしが爲めなり。今末法に入りぬれば餘經も法華經も詮無し、但だ南無妙法蓮華經なるべ
し。斯う申し出して候も私の計ひにはあらず、釋迦、多寶、十方の諸佛、地涌千界の御計ひなり
此の南無妙法蓮華經に餘事を交へば由々敷衍が事なり。日出てぬれば燈火詮無し、雨の降るに露何
の詮かあるべき、嬰兒に乳より外の物を養ふべき歟、良薬に又薬を加へぬる事なし。此女人は何と
なけれども、自然に此の義にあたりて仕終せるなり、尊とし尊とし。(一七一六)

これは名高い御書であります、日蓮の弟子の中に、法門研究といふことに依つて、いろ／＼の法門

を振弄んで、却つてそれが爲めに信仰を害する人がある、それは宜しくないことである。この文章は餘程注意して置かなければならぬ、「法門知りた氣に候ふ人人」といふ者を攻撃してあるので、本當に法門を知るのが悪いのではない、「知りた氣に」といふのは知つたやうな顔をするので本當に知らない、氣が利いたやうな間の扱けた者をいふのである。「法門知りた氣に」といふ言葉があるからと言つて、何も知らぬ者が威張ることにはこれを使ふといふと、又間違つて來る、それは餘程注意しなければならぬ。何も知らぬ者が法門を研究して居る者に對して、「善いものでも、悪いものでも研究などはいかぬ、それも知らぬ者が法門を研究して居る者には惡しく候ふ氣に候といふ仲間ぢや」といふやうなことを説法者などが能く言つて居るが、それは自分が法門を研究せぬからである、さういふことは文章を解釋するだけの力が無いのである。「法門知りた氣に候」といふのは、知つたやうな顔をして筋が違つて居る、所謂生兵法大疵の本といふので、本當に兵法を學んで悪いといふことはない、けれども生兵法といふことは悪い、法門を學ぶことが一概に悪いやうに言つて、この御書を濫用する者が非常に多いが、それは皆自分が至らざるが故に左様なことを言ふのである。それは他の御遺文から對照すれば直ぐ判ることであつて日蓮聖人は何處までも教の意味合ひを能く説き教へられたのであつて、法門を知つて信する者と、知らずに信する者と、どつちが善いかと言へば、それは法門を知つて信する方が宜い。坊さんの中に就ても有解無信、無解有信、有解有信といつて、それだけの了解もあり信仰もある者と、了解無くして信仰だ

け有る者との比較といふものは、「得受職人功德法門鈔」といふ御書があつて詳しく説いてある。無論行學といふものは日蓮の奨励した所である、一方から言へば「日蓮の門下は一切經を安置し、八宗の章疏を修學すべし」といはれて、非常に法門の研究を説いて居る、日蓮聖人自身も二十六の歳よりあらゆる方面に勉學をして、非常な熱心を以つて法門を研究した者である。然るにこの「法門知りた氣に」といふ言葉を濫用して「法門研究などするのは馬鹿漢だ」……といへば、日蓮聖人が一番大馬鹿漢になつてしまふ。昔からさういふ馬鹿漢が澤山居つて、無茶な事はかり言ひ居つたけれども、そんな無茶なことは今後全廢せんければいかぬ。「法門知りた氣に」といふのは、法門を振弄んで本當に判らない、さうして却つて信心をして居る者の疑ひを起すやうなことを言つたり、迷はずやうなことがあるから、それはいかぬといふ事を攻撃せられたのである。

それからモウ一つは、この南無妙法蓮華經があれば萬事それで適ふのであるから、これに他のものを交へることはない。「餘經も法華經も詮無し」と言はれたのは、お經が要らぬといふのではない、純粹の信仰を極める時には、信の一行を以つて足りるのであるから、お經は讀まなくても、一心決定したる所の信念の成佛といふことになるから、その時分には自我偈も要らなければ方便品も要らない、但だ南無妙法蓮華經で宜しい、これで必ず成佛が出来る、萬事成就するといふ事を説いたに過ぎない。けれどもそれが爲めに教の精神を捨てしまふといふことはないのである、南無妙法蓮華經さへ唱へて居つた

らどんな考へでも構はないといふやうなことを言ふのは、唱へ言葉といふ事と、意識といふものを混同して居ることである。佛教に於て身口意の三業といふ、その口業と意業の關係といふものは、口だけでいふ事でも實は意で考へて居る、それでなければ駄目なのである、意に於て亭主なら亭主の事を考へない、他の事を考へて居つて、さうして口先だけ「あなたが大事ぢや」といふやうなことを言つても何にもならぬだらう、言葉だけ「あなたが大事だ」といくら言つても「實は心には考へて居ないのだ」といふことになつたならば、それは嘘である。だから南無妙法蓮華經と口だけ言つても、心が南無妙法蓮華經を唱へるその意識といふものを考へなければならぬ。それを意識は違つて居つても何でも宜いといふならば、それは丁度日蓮聖人が言つて居る、心を離してしまつたならば、何を唱へても蛙が鳴くやうなものであるといふ、それに違ひない。唱題成佛と言つて、宗教といふものが精神無しに何を考へて居つても構はぬ、「焼芋を食ひたい南無妙法蓮華經」「刺身が食ひたい南無妙法蓮華經」……そんな無茶な事はない。言ふ迄もなく精神の意識といふものから來なければならぬ、その意識は何も面倒な事を要求するのではない、學問や理窟を控ね廻すやうなさういふ智力を要求はしない、宗教は醇乎として醇なる情操といふものを尙ぶのである。親なら親が有難いといふ心を本にして、親の前に頭を下げるといふことでなければ、「この親は馬鹿だ」と思ひながら頭を下げたのでは、ナンボ下げても駄目ぢや。さういふ風に身口意の三業といつて、問題は身と口と意の三つに分れるが、その場合に意業正位と言つて、

意が中心にならなければならぬ。信念成佛といふ事もやはりこの意である、だから「信心」といふ「信心」といふやうなことは餘り言はぬ、信心の溢れが口に出て來るのであるから、心といふものが大事である、その心にはそれが有難いといふ意味を考へて來なければならぬ、その場合には少くとも「観心本尊鈔」の終にあるやうに「佛大悲を起して妙法五字の内に此の珠を裹みて末代幼稚の頭に懸さしめ給ふ」といふ、佛の大慈悲より出で、この法門の中に一切を籠めて與へて下さつた、即ち佛を意識してこのお題目が有難いといふことに行かなければならぬものである。之れを壽量品に於ては「父在しなば我等を慈愍して能く救護せられまし」といふ、父を思ふの心よりしてこの良藥を服むといふことになつて居る。それ故に佛を戀ひ慕うてさうして法を信する、即ち戀佛信法といふことになつて來る、お自我を見ても「戀慕の心を懷き」とか「渴仰の心を生ず」といふやうにある、この戀慕の心、渴仰の心といふものは佛様に對して皆起つて居る、さうして南無妙法蓮華經と出て來なければならぬ。佛に對する渴仰の精神は除つてしまつてもお題目さへ唱へて居つたら宜いといふやうな意味は邪説である、それでは壽量品の全部が死んでしまふ、「開目鈔」でも何でも大事な御書は皆死んでしまふ。又元來佛教に於て佛様を捨て、しまつても宜いといふことならば、日蓮聖人の所謂念佛無間もなければ禪天魔もない、此方がそれよりもつと天魔ぢやないか、彼等より先きに地獄行きぢやないか、そんな無茶な事を日蓮主義が言つては仕方がない。何故に日蓮聖人が禪天魔と言つたかといへば、佛を蔑ろにするが故に天

魔と言つたのである、何故に念佛無間といふかといへば、本佛を排して述佛の彌陀に行くが故に、本佛に反する點に於て念佛無間の議論が起つたのである。それを日蓮主義自ら本佛も何も忘れてしまふといふ事であつたならば、まるで論旨といふものは立たぬ。であるから斯ういふ御文章を以つて、お題目を唱へさへすれば事足りると一概に言うてはいかぬ、それを唱へるに就ての意識といふものを明かにしなければならぬ、心得が要らぬといふやうなのは亂暴な話である、面倒な心得、拗くれた心得は要らぬけれども、酔乎として酔なる『有難いッ』といふ心、それは何が有難いのかと言へば佛大慈悲を起して我等に與へ給ふ南無妙法蓮華經である、佛様を憶念し來つて南無妙法蓮華經が有難いといふことになるのである。それを佛を蹴つてしまつてお題目が有難い、この字が有難いといふやうな議論もある、『何と言つたつて有難いぢやないか、聲が生へて居るぢやないか、このお題目の字は光明點と言つて、光明がさして居るぢやないか』といふが、それは唯だ墨で長く引つばつて書いたゞけのものである。さういふ字が有難いといふ解釋は日蓮聖人もして居るけれども、それは眞言風の解釋で、壽量品からはそんなものは出て來はしない、壽量品からは今申す通り佛を通してさうして擣符和合して是好良藥を子に與へて服せしむるといふ、この中から出て來るのである、それは眞に大事な事である。今日一般のドンドコ法華といふものが腐つたのは、このお題目に關する意識といふものを少しも教へなかつた、唯だ形式に流れて口先だけになつてしまつて、『一貫三百どうでも宜い』といふ、どうでも宜い南無妙法蓮華經に

なつてしまつた。このドンドコ法華といふものは、段々に腐りが入つたものであらうけれども、今日は極點に達して居る、お題目を振り廻さへすれば何でも宜いといふ、そんな宗教は恐らく他にあるまい唱へ言葉のアーメンならアーメンといふ事を持つて來て、これだけで宜い、他は何でも構はぬ、アーメンさへ言つて居れば宜いといふやうなことは、それは西洋の基督教に於ては決して許さない事である。又眞宗なら眞宗が阿彌陀様も何も忘れてしまつて、ナンマイダーを言ひさへすれば蛙でも、狐でも構はぬ、ナンマイダー、そんな事があるべきものではない、ナンボ易く言つても阿彌陀様のお慈悲といふものは、感激しなければならぬといふことだけは説くのである。法華宗ばかりがかつた、病見たいに何でも構はぬ、唯だ法華開會だ、お題目ちやと口先ばかりでいつて居る、これは實に唱題行といふことを濫用し過ぎた弊害であつて、唯だ口で唱へて成佛するといふことはない、一番易い所でも一念隨喜の心、一念信といふものを要求するのである。この信なければ成佛は出來ない、信といふ字は口ではない、唱へることではない、心の意識である、どうしても宗教は精神的でなければならぬ、それは終ひには形の事もいふけれども、先づ最も大事な所は曰く言ひ難きこの燃えて居る精神である。そこに一切のものが成就する力を有つのである。

本尊講草

本稿は往年野口上人の御講演の御草案であり、且つある布教師に筆授されたものであります。

故野口日主師

曼荼羅本尊に就て

日蓮主義研究ハ天下ニ滿
曼荼羅本尊ニ到テ歸着トス

世界改造ノ聲高
曼荼羅本尊ヲ表準トス

一、本尊義意及譯

三寶一具之本尊

妙法マンダラ

- 十界圓具之本尊
- 諸波羅密之妙境
- 日蓮主義之全面
- 天地法界之本主
- 一切經及諸波羅密之結晶
- 一切宗教之本尊統一
- 一切衆生根本依止處
- 即身成佛之龜鏡
- 世界人類最後之救濟主

圓輪具足
十界勸誡

極精醇
堅聚集
聖衆集會處

○閻浮統一之本尊

譯

○密宗論出セリ
隨義轉用
妙宗眞實 曼荼羅也

二、體相

本尊抄

其本尊爲、鉢本師ノ娑婆ノ上ニ寶塔居、空塔中妙法蓮華經左右ニ釋迦牟尼佛多寶佛釋尊ノ臨土上行等ノ四菩薩云々

日妙書等ニモ出タリ
本尊抄ヲ本尊儀軌トスルハ古今ノ通轍ナリ

○日什大正師

寶塔居、空ハ、娑婆体一ノ當寂光土ヲ示シ、
二佛並座ハ境智不二ノ形ヲ表シ、依正不二ノ義ヲ

輪圓具足
功德集
諸佛集
精醇
極無比味
無上過味

示ス

四菩薩臨土ハ 始覺ヲ廢シ本覺ヲ顯ハス也

○法佛同住ハ 人法一体ノ旨ヲ示ス也

誠ニ是レ多神統一神ノ

大本尊 世界人類最後ノ救済本尊也

○此大本尊 大日本國ニ現ハレタルハ

不可思議ノ大因縁也

日蓮上人曰 當身ノ大事云々

○此御本尊ヲ 天台智者大師ハ 大蘇道場ニ拜シタ

ルモ速化ノ故ニ弘ムル能ハス

獨本化上行ノ再身 日蓮大法將ノミ寫象顯現ノ資

格權能アルモノ也

○尤モ今ノ本尊ハ 寫象本尊ナレバ之ヲ透シテ 實

在ノ本尊ヲ見奉ルベキ也

而モ此本尊ヲ措テ又實在ノ本尊ヲ見奉ルコト難シ

三、本尊ノ種別

法界自爾ノ本尊

靈山實在ノ本尊

衆生心具ノ本尊

念念緣起ノ本尊

依正各具ノ本尊

道場莊嚴ノ本尊

四、本尊ノ實體

久遠實成釋迦牟尼佛也

經曰 如來秘密神通之力

又曰 年紀大小 或說己身 六或身也

日蓮上人 闍浮第一ノ本尊可建此國

五、諸種ノ本佛說

(1) 法界本尊說

總勘文抄

此三如是ノ本覺如來ハ十方法界ヲ當體トシ 十方

法界ヲ心性トシ 十方法界ヲ相好トス

草木口決

草ニモ木ニモ成リ玉ヘル壽量品ノ釋尊云々

當體義抄等

西洋哲學

極微論

原素論

唯物論等也

(3) 衆生本尊說

諸法實相抄

凡夫ハ體ノ三身 本佛ゾカシ

當體義抄

我等ガ如ク一切衆生モ妙法ノ當體ナリ云々

西洋哲學

コント 人間神聖論

人類教論等也

(2) 五大本尊說

阿佛抄

阿佛上人ノ一身ハ地水火風空ノ五大也 此五大ハ

題目ノ五字也

總勘文抄

地水火風空滅亡セバ我身モ又滅スベシ

(4) 己心本尊說

本尊抄

我等カ己心ノ釋尊ハ五百塵點劫乃至所顯ノ三身ニ

シテ無始ノ古佛也

總勘文抄

己心ト心性ト心體ノ三ハ己心ノ本覺ノ三身如來ナリ云々

西洋哲學

唯心論

純觀念論

內觀論等也

(5) 信者本尊說

日女抄

此本尊ハ全ク餘處ニ求ムル勿レ 我等衆生法華經ヲ持テ 南無妙法蓮華經ト唱フル胸中ノ肉團ニ在スナリ 是レ九識心王真如ノ都トハ申也 當體義抄

本門壽量當體ノ蓮華佛者 日蓮ガ弟子且那等父母所生ノ肉身是ナリ云々

(6) 宗祖本佛說

日蓮ハ末法ノ本佛ナリノ說

下山抄

釋尊ヨリ大事ノ行者日蓮云々 聖人知三世抄

日蓮ハ閻浮第一ノ聖人云々

本化即本佛

僧寶中心ヨリ起ル說也

(7) 妙法本尊說

實相抄

釋迦多寶ノ二佛モ用ノ佛 妙法蓮華經コソ 本佛ニテ候ヘ

曼荼羅供養抄

顯佛未來記

本尊供養抄 等

結

各方面ヨリ本佛觀ハ立得ヘケレ共 吾人信仰ノ絕待依止處ハ 久遠實成ノ釋迦牟尼佛 主師親三德有緣之本主本尊也 (以下次回)

日蓮教學講座

(第十七回)

文學士 河合 陟 明

- ★ 我れ涅槃の後に當に比丘有るべし、像持律に似て少し經を讀誦し、飲食を貪嗜し其身を長養し、常に是言を唱へん「我れ羅漢を得たり」と、外には賢善を現し、内には貪嫉を懷かん。實には沙門に非ずして沙門の像を現し、邪見熾盛にして正法を誹謗せん。……若し善比丘 法を壞る者を見て、置いて呵責し驅遣し舉處せずんば、當に知るべし是人は佛法の中の怨なり。若し能く驅遣し呵責し舉處せば、是れ我が弟子 眞の聲聞なり。
- ★
- ★
- ★
- ★
- ★

(大涅槃經)

第一章 日蓮聖人出現以前の國情

北條を始め關東のわからすやの田舎武士が、承久の亂といふ大逆無道を敢てしたのは、これを思想上

より見るときは、是非を辨へざる、たゞ力の重視、權力意識、權力意志が、當時鎌倉武士の間に謳歌さ

れし禪の慢見的一切空無の思想と給びつき、外に何等の尊敬すべきものを知らず、徒らに自尊自負の僭越の思想に走らしめ、はたまた武士に適したる思想として、正理にも非道にも順逆ともに一種果敢なる氣風を馴致して、たゞに世間の俗事を等閑視するといふだけではなく、社會の秩序差別を無視するの極は、我が皇國人倫綱常の心髓たる君臣の大義大節そのものまでも、これを空無し破却し蹂躪してしまつたものである。

かの平清盛は権力意志の權化であつて、横暴至らぬ間もなかつたが、彼と雖も、後白河法皇に反抗したのは、君側の讒人を除かんとしてあつた。而して公卿三十餘人の官職を剝奪したまでである。平家追討の木曾義仲は、また京都に攻め入つて、やんごとなき方々の首級を市中に曝したといふほどの酷い事をする盲目滅法の無茶苦茶者であり、皇室を意に介せず朝威を冒し奉つたが、彼も亦讒人を除かん

の歸依を受けて威張つてゐた彼の佛教諸宗は、何を教へ何を説きしや。禪はすでに語るに足らず。彼れが武門の間に喜ばれ鎌倉武士の宗教として、しかもそれをしてかゝる大逆を敢てせしむるの氣風を馴致したのに對し、當時の民衆を風靡したる念佛門に至つては、かの法念の立つるところの選擇集の所説が、我が國祖の神明をも敬せざるの邪義なることはいふまでもないが、彼れは晩年弟子の罪によつて土佐に流され、流されたといつても、後鳥羽天皇の命を關白兼實が申し請うて讃岐の國の或豪族に預けたのであつて、大した難儀をしてゐない、その僅かばかりの朝廷のお答めに對して、彼れは一體何と言つてゐるか？

念佛の行はそんな禁制をしたつて止まりはしない、自分は却つて流罪によつて邊鄙の田舎者に教へることが出來て都合がよい、しかしながら自分が弘めるところの淨土の法門は、惡業を

としたのである。而して彼等はいづれも敢てその幽囚の計を遂げなかつた。勿體なくも天子様に對して、恣に帝位を落し奉つたり、これを烏流しにした。奉らうなどいふ考はなかつた、しかも猶ほ誅滅を免れなかつたのである。しかるに義時の輩は、同じく清盛、義仲の如き武斷の權力を以て朝廷に迫り、しかも彼の二人よりも更に酷く、彼等すら敢て爲さざりし無類の大逆を平然とやつてのけ、しかも何等の天誅すらこれに及ばざりしが如きは何ぞや！しかも天下一人の起つてこれを怪しむものなし。世は擧げて權力の爲に風靡され、人は擧つて威歩の前に屈伏してしまつたのである。たゞ残るところは功利主義、實利主義あるのみ。あゝ天道是非か。

そもそも當時儒者も僧侶も神道者流も、一體何をしてゐたのだ！皇室が逆賊の爲に縲紲の辱めを受けらるゝといふ非常な屈辱を蒙らるゝをも何と見てゐたのだ！殊に當時の國民精神の指導者として上下造る凡夫が、世を免れ救はれる肝要の法であるのに、今自分がこのやうな無實の罪、道ならぬ迫害を受けてゐるのであるから、念佛を守護する神祇冥道（諸天）等冥界のお力が怒つて、きつとその罰が來るだらう。長く生きてゐる人はその罰をまのあたり見ることができたらう。「但いたむところは源空（法然）が弘むる淨土の法門は、造惡の凡夫出離の要法なるが故に、念佛守護の神祇冥道、無道の障礙をとがめ給はんか。長く存命せられれば、因果の空しからざる事を思ひ合すべしとぞ仰せられける。」と斯ういふのである。

其後いくばくの歲月をへす、わすかに十箇年の間に承久の逆亂おこりて天下の騷動にをよび、君は北海の島に行幸して隱岐の院と號す、護臣は戰場に討負けて、或は命を失ふものもあり、まことに不思議にぞ侍る。

これによつて見れば、後鳥羽天皇は、法然の弟子に不埒があつた爲、それを諷り、法然をば土佐へ流された、たゞ僅かばかりのそれだけの罰として、天子様が北海の離れ小島に流されられて、終生そこにお暮しにならなければならぬやうになつたのだ……といふのが念佛門徒の考であつたのである。我々はかくの如きことを見て憤慨に堪へない、實に怪しからぬことを言ふ奴である。もし神祇冥道が法然を流した爲に怒つて、後鳥羽天皇様をさういふ罰に遣はせたとすれば、なぜ法然はその靈驗あらたかなるべき筈の念佛の功德を以てさういふことを止めないのか、諸天善神に申し請うて止めないのか、僅かに二年半ばかり邊鄙の豪族に養はれた、流されたなんていつても樂な生活である。しかもその罰として、畏れ多くも一天萬乗の君を逆臣の手に委ね、遂に十有九ヶ年悲憤無念の涙をのんで、北海の離れ小島に終生出づべからざる島守となし果てまらせて

しまつた。あゝ何事ぞ、怪しからぬことではないか反國體の逆惡思想ではないか。

かの念佛門徒かくの如し、その國家意識の謬妄にして勤王の大義を辨へざるごとかくの如し。しからば鎮護國家、現世祈禱を掲げて立ちし眞言門は如何禪、念佛が、主として武士と民衆との間に行はれしに對し、殆ど朝廷佛教、公卿佛教たりしこの密教(眞言)は如何。後鳥羽上皇は、北條の跋扈を伐たんとせられて、平安朝の中葉以來、皇位繼承を始めとし保元、平治、壽永の役等に際して朝廷の行事なりし如く、總て何事を爲すにも佛力加持の祈禱に依頼せんとして、諸寺諸社に奉幣し、天台の座主、仁和寺の御室、圓城(三井寺)、東寺等、諸寺諸山の眞言師、一世のいはゆる高僧名徳四十餘人をして日本國に渡れる大法秘法盡くさすといふことなく、いはゆる十五壇の大修法を以て盛なる祈禱を行はしめられたのである。それすでに王威を以て逆臣を討つ、

たとへば鷹の雉を取り、猫の鼠を食ひ、蛇の蛙を呑み、獅子の兎を殺すが如く、況んや佛法冥々の加護もあり、大火に枯木を加ふるが如く、大河に大雨をふらすが如く、いかでか事の成就せざることやあるべき。

かくて五月十四日、朝廷つひに關東追討の宣示を下され、先づ征伐の血祭りに、幕府の京都監視に遣はしめる六波羅探題伊賀判官光季を諷りたまふや、事鎌倉に聞え、泰時十五萬の大軍を率ひて攻め上り、六月十四日兩軍宇治勢多に戦ひしも官軍脆くも惨敗し、明るる十五日、泰時、時房等、勢猛に京都に入ると聞かや、この日まさに三七日修法の満願の日といふに、この報を聞くや、この時まで諸僧を引具して物々しく脂汗を流して殿上に祈つてゐた眞言修法の第一の導師が、まつさきに護摩壇を飛び下りて逃げ出したといふ醜態であつたではないか。あゝ何たる有様であらうか。そも朝廷かくの如きものをして

祈らしめらるゝとはまた禍なる哉。しかも諸君、彼等はその後どうしたか。見よ、今まで朝廷の爲に祈りぬし彼等坊主は、一度び朝廷痛ましくも地に塗れたまふや、忽ち關東に下つて頭をかたむけ膝をかゞめ、やうやくに武士の心に取入つて、犬の如くに尾を振つて幕府より扶持を貰ひ、諸寺諸山の別當となつては、かの王位を失ひし惡法邪法を取りいだして、先には皇家安泰と唱へし舌の根の干かざる中に今度は却て北條の爲に武運長久を祈つてゐる……咄、何事ぞ！節義節操を知らざる唾棄すべき振舞かな。それすでに人倫の大義をすら踐まず、況んや出世間の大道をや、國家を鎮め世を護り、人の師表となつて民生の魂を教はんことなど思ひもよらず。武士すら二君に事へず、況んや正邪曲直の別明かなるに於てをや、況んや尊王の大義存するあるに於てをや、況んや人道を佛道に引上ぐる宗教家の大使命を有するに於てをや。

彼等、京都の爲に盡したる者ならば、一旦朝廷にして敗れたまひし上は、腹を切つて死ぬなり、或は世を退くなり、毅然として己を潔くすべきものである。諸君、貧賤も移す能はず、富貴も淫する能はず、威武も屈する能はざるは大丈夫の本懐ではないか、況んや宗教家が權勢に阿ねるといふは、最も唾棄すべきことである。しかるにこれが遁げて行つて鎌倉に来て御祈禱するなどと云つて、寺や社の住職や別當にしてみらつてやつてをる。そんな奴が當時の諸宗の僧侶どもであつたか。あゝ道の廢れたるや甚しき哉！

天下の情勢かくの如きの時に、自ら佛法の眞を行すど誇れる律宗の徒輩はさて何をしてをつたか。當時極樂寺の良觀は、自らは一身の戒律甚だ堅固にして、聖僧高德の名を擅にし、外にはいはゆる社會事業を盛にして、或は癩病の者を助けるとか、或は扶養者のない者を救ふとか、或は貧乏人は可哀相

心霊を萬古につなぎ、綱紀を萬世に維持すべき善なる宗教の本領は全く隠れ、君臣の名分は逆賊に蹂躪せられてゐるではないか。しかるに彼れ良觀は、この日本國家の大義を忘れ、朝廷を粗末にする北條に頭を下げて、そこから少しばかりの保護を受けて救濟事業でもやれば、國家の大義はどうならうが、國家の生命は亡びやうが、そんな事は構はないといつてやつてをる連中ではないか。あゝ螢火を弄んで日月の光を隠し、日本久しく闇夜となつて魔魅の跳躑に亡びなんとす！

觀じ來らば我國當時の情勢は、現實界には陪臣權を擅にして大逆無道その極に達し、しかも舉國何人もこれを怪しまず、これを咎めず、これを叱咤するなく、却つて滔々としてその下に靡いて、あまつさへ「天皇御謀叛」などと以ての外のことを言ふに至り、全く幕府あるを知つて勿體なくも天朝あるを知らず。はたまた思想界に於ては、そもそもこの國家

だとか、一代の間に五萬人もさういふ者を助けたといふやうなことをやつて、鎌倉萬人の非常なる歸依を受けるに至り、たゞに北條が尊敬するのみならず婦人達が良觀房に歸依することは實に生如來の如くに思つてをつたのである。しかし彼は表面から見れば立派な聖僧であつたやうであるが、大體戒律などをやる者はその心は案外つまらないものであつて彼もやはりつまらない名譽心に驅られてやつてをつた、割合に偽善的な者である。それゆゑ事實は性の悪い坊主になつてをつたではないか。

否、否、諸君、そんな事どころではない、己れひとり形式的な戒律を堅固にし、また多少の人間を枝葉の末に救つたとするも、そもそも人倫道德の大本は根底より覆へされ、尊王の大節は地を拂つて空しくなつてゐるではないか。國家全體、國民全體が邪道に陥つて、やがては地獄の苦みをも受くべきものなるに、なぜにこの大局に目をつけざるや。人間の

人生を現實界にまれ心靈界にまれ、共に救ひ共に導き共に匡すべき、當時隨一の教權たる佛教諸宗そのものが、その朝廷にあると、武門にあると、民間にあると、而も非高僧にあると、そのいづれたるを問はず、揃ひも揃つて破佛法破國の因縁を造り、末節に拘泥して大義を放擲し、佛陀の本懐を味まして腐敗し墮落し果つ！あゝ大恩教主釋尊を捨て、その明教を蔑にして、「天に二日なく國に二王なし、一佛境界に二尊の號なし」といふ佛法絶對の心靈界裡の大義名分を踐み違へたる、その國家的影響はかくの如くに大いなるか。苟くも佛教徒たるものが、釋尊を捨て、他土他佛に走るは、宛も自國の君主を抛つて他國の君主はた卑賤の輩を奉戴する亂臣賊子の所業たらすんばあらず。果せる哉、歴史の事實はまさにその如く、一分も違はず現實の事實となり來り佛法王法兩つながらその大義大節を踐みにじつてしまつたのである。知るこれ當時は日本國家が思想的

に滅亡したる時であり、然り實に皇國國體の破産し
果てたる時である。

あゝ皇國眞に靈威あらば 何人か一大巨人を生み
出して 護國の柱となし、儼然勤王の大義を唱へて
國民上下の不忠を警破せしめ、日本の世界的天職を
明かにして一大理想の文明を打ち樹てしめ、はたま
た佛法眞に神力威應あるあらば 一大法將を出現せ
しめて 快刀亂麻を斷ち、紛亂邪執の諸宗を審判し
て衆生長夜の迷夢を覺醒し、一大正法を確立して佛
教統一の大旗を翻へし、釋尊出世の本懐に適ひて法
界(宇宙)無邊の群生を濟度し、如來神祕の豫言に
應じて未法惡世の法難を忍受しつゝ、本佛實在の大
教義を顯して久遠の靈光を天地に輝かしむ——あゝ
是れなくんばあらず 是れなくんばあらず。(續)

實在の根本原理 (その二)

中村清一



日蓮主義の實在觀

前回(一月號)に日蓮主義の認識論と題して、日
蓮主義では、佛の覺によつて始めて知られる宇宙の
根本實在といふものと吾々が日常經驗してゐるこの
現實の世界とが、全く同じ物であつて二つでない、
〔諸法即實相〕といふことが、實在といふことにつ
いての一つの根本的な要求となつてゐるのであつて
この立場は天台大師が一切經の判釋(お經の優劣に
ついての體系的批判)に用ひられた『化法の四教』
即ち『藏、通、別、圓』の四つの立場の中、圓教に
至つて始めて表はるゝ考へ方であるといふことを述
べた。

いま念のためにこの点をもう一度繰返して述べる
ならば、大凡佛教で吾々が、無常と苦しみとに煩は
されるこの現實の迷の有様から眞實に常住であり安
穩であるところの佛の覺の境涯に進まうとする際、
この現實の迷の世界と佛の覺、即ち涅槃の中にあ
はるゝ實在の世界との關係を如何に考へるかといふ
点について、いまいふ藏、通、別、圓と稱する四つ
の異つた考へ方があり、従つてその修行の方法も之
に應じて異なつてゐるのである。而して大師の説明
によれば、釋尊御一代の説法の中、第一時の華嚴部
では別、圓の二教を、第二時の小乗である所の阿含
部では單に藏即ち三藏教だけを、第三時の方等部で

は四教の全部を、第四時の般若部では通、別、圓の三教を、最後第五時の法華部では純粹に圓教のみを説かれてあるといふのである。

第一に三藏教といふのは大体に於て小乗佛敎の考へ方であつて、この現實の世界はあくまで苦であり空であり、無常であり、無我であるから、佛の覺、即ち涅槃といふものはこの現實の生滅、乃至はこの生滅するところの吾等の精神や肉體そのものを滅ぼしてしまつて、もはや生ずるものもなく滅するものもなき全くの寂滅そのものの境界に入つて行くことに他ならないと考へるのである。即ちこの現實といふものはかの『ひきよせて結ばば草の庵なり、解くればもとの野原なりけり』といふ歌の如く、種々の因縁の相集まつて成立つてゐるところのものであるから、そこには一定した姿といふものはなく、又恒久的に存在する何物もないといふ意味で『空』といはれるのであるが、之に對し涅槃の方は、この現實

く出もない。譬へば虹といふものはたゞ太陽の光と水滴と吾々の眼との位置の關係から起るものであるが、そこには虹といふ特別のものはなく従つて又その生滅もない。故に虹そのものがその本性からいつて直接に空なのであつて、あるといへばあるやうであるが、無いといへばもとく無いものである。一切萬法をこの様にして本來空なりと考へるところに通敎の考へ方があるのである。故に通敎では現實といふものがそのまま涅槃と同じ意味の空であり、この空の智慧を得れば現實の生死そのものはあつてもそこにこの生死を解脱したる眞の寂靜の境地を味はつて行くことが出来るのであつて、この生死の中にあつて生死に煩はされざる解脱の智慧を般若波羅密といふのである。今の禪宗の立場がこれに近い。そこでこの立場では現實と涅槃とを共に空であるとして同一視するけれども、それは否定的な意味に於ける同一であり、この同一といふ考へに達するには

の相を否定したる結果として、そこには何物も生滅せず従つて又何物も存在しないといふ意味から『空』といはれるのであつて、同じ空でも現實の空と涅槃の空とは、その意味が全く異つてゐるのである。而して涅槃といふものはもとく現實の生滅を滅ぼした所にはあらはれるものであるから、この意味で兩者は相對立してゐるものであり、吾々がいふ所の日蓮主義の實在觀、即ち現實と涅槃との根本的一致といふ考へは、この三藏敎の立場とはどうしても相容れないものであるといはねばなるまい。

次に通敎の立場はどうであるかといふに、こゝでは現實の生滅を實際に無くしてしまふといふことはもはや必要と考へられてゐない。何となれば、現實はその表面の相はなるほど生滅を免れないものであるが、その内面の本性から考へれば生滅を超えた無性のものであり、そこには生もなく滅もなく、一もなく異もなく、斷もなく常もなく、來もなく現を生滅するそのまゝの相に於て見ることもなく、一旦これを空の見地から見直して行かねばならないのであるから、これは現實を現實としてそのまま肯定し直接に觀察した場合の同一とは異なる。故にこれは吾々が前回述べた意味の實在の論證には役立たないのである。

かくの如くして藏通二敎は實在を説かない。即ち現實は生滅を免れない假のものであるといふ意味から、又通敎では、その本性が有無を離れた空のものであるといふ意味から實在にあらす、これに對し、涅槃の方はやはり根本的に空のものであつて、一種の否定的な絶對であるといふことはいへるが、之をそのまま實在と名づけることは出来ないのである。

第三に別敎の立場はどうであるかといふに、これは涅槃を肯定的に見る意味で藏通二敎とは異なつてゐる。即ち涅槃は生滅し變遷する現實の有様とはもちろん異つてゐるから『有』若しくは『假』ではな

い。さりとて又藏通二教の考へる様な否定の意味の「空」でもない。この假空の兩極端を離れ、自らは一切の生滅や差別の相を脱した全然無相のものでありながら、而もその中に一切の生滅一切の差別の根源を藏してゐる一種の絶対即ち實在的なものを「中道」と名ける。しかしこの中道若しくは「真如」の實在性はやはり三藏教と同じく現實の生滅する姿を否定したところに成立つのである。即ち三藏教では現實の生滅を否定したあとの消極的な空の有様を涅槃とするに反して、別教では現實の生滅を否定しても尚そこに一種の肯定的な實在的なものが残る譬へば海といふ現實から變遷し生滅する波といふものを取去つても尚そこにこの變遷生滅を超えた水といふ實在が残るやうなものである。この波なき水、波立たぬ静寂の水といふものが、別教の涅槃即ち實在に他ならない。それ故に別教でも、現實は生滅を有し、涅槃は生滅を無くしてゐるといふ意味で、兩者

の間には差異があり、現實と涅槃との同一性といふことは三藏教の場合と同じく成立たないのである。第四の圓教はこの別教の波立たぬ水を實在と見る代りに、波立てる水そのものを實在と見るのである。故に涅槃は現實そのものをその不生不滅の側から考へたものであつて、現實の生滅は涅槃の中に於てもそのまゝ存在するのである。生滅する現象の全体が一方から見れば不生不滅の實在である。即ち圓教の中道は別教のそれの如く現實の假や涅槃の空を斥ける意味の中道ではなく、現實の假と涅槃の空とを統一し一如したる意味の中道であつて、之を「即空即假即中」といふのである。然るにこの圓教の立場に於ても尚二つの異なつた立場が成立する。一つはこの現象即實在の全体を佛の覺によつて始めて表はるゝ涅槃そのものの内容として考へるのであつて、衆生の迷へる現在の一念は未だこの絶対と一つになつてゐないといふ見解である。他はこの實在がひとり佛

の覺の中に存するものであるばかりでなく、衆生の迷へる一念の中にも既にこの全体が存在してゐるのであると説く。前者は佛の覺の中に現實の全体を包む意味の「一念三千」であり、後者は衆生の迷へる一念に世界の全体を具するといふ意味の「一念三千」である。台家に於ては勿論、四明法師を中心する後者の立場を正統派となす。前者は尚別教の見解の一部を残してゐるものと解されてゐる。前者に於ては單に現象の全体が實在と一つであることを意味し、後者に於ては個々の現象が直ちに普遍、即ち實在の全体と空同であるといふことを意味してゐるのである。

さて、吾々が前回に試みた認識論上の研究に於ては、圓教のこの二つの行き方の中何れによるかといふことは問題にしなかつた。吾々は單に、現實と實在との根本的同一といふことを假定し、それによつて二乗作佛、本佛實在といふが如き法華經の諸教義

が認識論的に缺くべからざる所以を反省したのであつた。之に反して、天台大師に於ては決定的に後者の立場が採用されてゐるのである。何となれば、大師に於ては單に經驗と實在との根本的一致を假定するばかりでなく、その實在である所の經驗、即ち現實の十界そのものがもつて吾々の主觀の中に先天的に具有せられ潜在してゐるといふ別個の假定を導入し、そこに十界互具、一念三千といふ一つの形而上學的體系を樹立せられたからである。それは宛もカントが、數學と自然科学の眞理の成立する所以を、單に理性と經驗との根本的一致に見出したといふばかりでなく、この一致の成立する所以を、主觀がそれ自身の原理（感性及び悟性の法則）によつて積極的に客觀を構成するといふ一種の主觀主義の思想によつて説明し、そこに自我を中心とする近世形而上學への新しき途を開いたと同様であらう。そこで天台大師に従へば、吾々は十界の一切に

通じ、一切を包攝する根本的實在者としての本質を具へながら、而も因果の法則のまに／＼その十界の中の一界の地位を占め、他の九界は、單に潜在的の本質として有し或は部分的斷片的に實現してゐるものに過ぎないのである。それ故に吾々はいまこの互具論の立場から、前回述べたところをもう一度繰返して考へて見ようと思ふのである。その際、吾々が前回用ひた「覺」によつて表はれる宇宙の根本實在と、迷へるものゝ迫る現實世界との根本的一致」といふ前提は「衆生の迷へる一念の中に現實の十法界の全体を本來具有してゐる」といふ形而上學的思想によつて置き換へられるのである。

その第一の問題は二乗作佛についてであつた。抑も天台大師の教判には約教判と約部判との二つがある。第一の約教判の方では、小乗の阿含部は別として、大乘に屬する華嚴方等般若三時の諸經は何れもその内容の内に圓教を具へてゐるから、その圓

されてゐるのか、個々のものが全体をその中に攝取してゐる宛も帝釋天の網の目につけられた一々の水晶の珠が他の全部の珠をその中に映してゐるのと同じやうな有様が、佛の覺の内容をなすものであるといつたやうに、別教よりも一歩現實と涅槃の境即ち眞如實相との關係を近づけてゐることは事實であるが、而も迷へる衆生の一念の中に、乃至は現實界の一色一香一塵一粟といつた様な個々のものゝ内に現實の十界の全宇宙を具へてゐるといふ、天台の互具論の意味の圓教は果して爾前の經の中に説かれてゐるといふことが出来るであらうか。假令一部に説かれてゐるやうに見える節があつても、爾前の經が別教以下の内容を含んでその立場が一貫してゐない以上、かゝる形而上學的體系をそのまま他經の内容として論ずることは絶対に許されないことである。又かりに諸經にかくの如き體系ありと假定しても、二乗作佛を許さぬ經は結局十界互具の現實的基

教を受けることによつて成佛得道が出来る論する「與」の立場を採つてゐる。之に反して約部判の方では、この三時の經典は法華經の如く純粹に圓教の立場から全体を統一してゐるのではなく、他の一、二、若しくは三教と並立せる圓教を説いてゐるのであるから、その立場が一貫せざる意味に於て、純粹ならざる意味に於て、絕對判即ち統一觀を示してゐない意味に於て、是等の諸經によつては成佛が出来ないと論ずる「奪」の立場を採つてゐるのである。而して前の約教判の場合に於ては、法華經の圓と他の大乘經の圓とはその内容が同一であるといつてゐる。しからば爾前の圓と法華の圓と全く同一であるかどうかといふに、ある方面では同一であつても他の方面では同一でないといふやうに、観点によつて多少異なつた考察が出て來て一概には斷定出来ないといふのが本當のことではなからうか。佛の覺をあらはす涅槃の實在の中にあらゆる現實の相が攝取

礎を缺き又實際上の歸結を認めぬものといはざるを得ない。日蓮聖人が華嚴宗及眞言宗を以て天台の一念三千を盜めるものなりと憤慨せられた点から見ても、盗んだといふ以上所依の華嚴經や大日經に十界互具一念三千の内容が存してゐないと斷定されたものと見なければなるまい。要するに爾前圓は別教よりも今一歩現實と實在とを接近させてゐるとしても天台の意味の十界互具論は爾前の立場に於ては成立せぬものと斷定すべきものであらう。さて二乗が作佛しないならば何故に十界互具が成立しないかといふに、十界互具は十界の各衆生の根本の同一を前提とするから、この點に於て二乗のみを不作佛とする爾前の説と一致しないのは當然である。殊に個々のものをそのまま實在となし絕對者普遍者となすのであるから、二乗もこの意味で本質上佛の性質を具へてゐるものといはざるを得ないのである。然らば二乗が不作佛ならば菩薩も不作佛とな

生も亦同じく成佛が出来る、といふことに歸着するのである。十界互具と二乗作佛との關係が、これ程までに密接であることを、よく味はつておかねばならぬものと思ふ。(つゞく)

一月號誤謬訂正

- 一、十七頁「數字」は全部「數學」の誤り
- 二、二十頁上段五行目及六行目「二乘」は「三乘」の誤り

るといふ「戒體即身成佛義」や「十法界事」の説明は如何といふに、若しも二乗が作佛せず菩薩のみが作佛するものとすれば、二乗と菩薩との間に共通の本質がなく従つて又二乗と菩薩とは互具することに本質がない。又若し二乗のみが不作佛にして而も二乗と菩薩とが互具するものとするならば、菩薩も亦作佛することが出来ることとなるのである。何となれば互具といふことは、互に他のものになり得るといふことを前提とする。具するといふことは一時潜在的に具有することであつて、その潜在が顯現するときは菩薩は二乗となり、二乗は菩薩となる。二乗が菩薩となり菩薩が佛になるに拘らず、二乗が佛になり得ぬといふことはあり得ない。故に十法界中假令一衆生でも作佛し得ざるものありとすれば、それと互具の關係に立つところの一切衆生盡く作佛せざといふことになる。又一衆生でも眞に作佛し得ることとが斷定されれば、十界互具を許す限り他の一切衆

人生と法華經

池ノ内三雄

目次

懺悔篇 第一

- 一、自己を顧りみて 二、科學と現實 三、反逆の子と母性愛 四、妙法蓮華經と私 五、牛生の懺悔(一) 六、牛生の懺悔(二) 七、眞實の使命 八、目醒めたる後に

知教篇 第二

- 一、信仰に就いて 二、大無量壽經と法華經 三、觀音聖人と日蓮聖人 四、一字一句皆眞言 五、「根本佛教概観」を讀みて 六、四法印に就いて 七、宇井博士の誤謬 八、大乘非佛說論の克服(一) 九、大乘非佛說論の克服(二) 一〇、一代佛敎を鳥瞰して

本尊篇 第三

- 一、佛陀論の諸問題 二、佛身觀の史的考察 三、誤れる佛身觀 四、觀世音菩薩普門品第二十五の解決 五、觀世音菩薩の正體 六、眞言宗の佛身觀 七、釋迦牟尼佛と十方三世の諸佛 八、法華經中心の佛陀論 九、大總持門としての法華經 一〇、法華經を本尊として 一一、一切衆生の本尊としての釋迦牟尼佛 一二、キリスト敎に於ける神

戒壇篇 第四

- の諸問題と日本思想
- 一、思想と國體 二、國體の意義に就いて 三、教育勅諭と法華經 四、法華經信者(日蓮主義者)の國體觀 五、日本國體と世界統一論 六、法華經と日本國體 七、精神的大道場としての戒壇 八、僧敎と國民教育 九、正法國家の教育方針 一〇、正法と國家組織 一一、正法國家の產業道 一二、觀音菩薩と產業道 一三、日本國體の歴史的大使命と產業道

題目篇 第五

- 一、眞善美と妙法蓮華經 二、妙法蓮華經と大慈悲心 三、蓮華台上より大自然を見る(一)―太陽と火 四、蓮華台上より大自然を見る(二)―空氣と水 五、蓮華台上より大自然を見る(三)―大地 六、大地の宗教としての法華經 七、念佛と題目 八、地涌菩薩とは何か 九、實生活と法華經 一〇、二宮尊徳翁と法華經 一一、勸農思想と私の體系 一二、本化立正の農法の意義 一三、菩薩行としての本化立正農法 一四、本化立正農法の提唱 一五、本化農法とその實踐法

久遠實成の釋迦牟尼佛は、如何に

共產主義者をも救護し給ひしか

今此の三界は皆是我が有なり。其の中の衆生は悉く是れ我が子なり。而も今此の衆は諸の患難多し。唯我一人のみ能く救護を爲す。

南無妙法蓮華經

懺悔篇 第一

一、自己を顧みて

人間があらゆる動物に優越してゐる點は、自己を反省し、懺悔することが出来る點であるとは、すでに先哲の觀察せるところである。人に反省と懺悔といふことがないならば、宗教も道徳も、又法律も無益である。況んや、牢獄をやだ。

だがしかし、人が反省の心を起すのは、自己を愛する心より起るのである。この自己を愛する心が起るや、人は自己の本質といふことに就いて哲學をはじめめる。ある人は自己の歩める道を正しいと思ひ、ある者は自己のなしたる行爲の誤れるを知るであらう。それは共に反省の結果である。若し正しいと思ふ者は更に勇氣百倍して、驀進せんと思ふであらうし又、自らの過誤に氣が付いた者は自ら悔ひ、より高き何ものかに向つて改めを誓ふやうな氣持が湧き起るのを感じるであらう。それは共に直き心の持主である。だが又、一度も反省

することなしに自己を正しきものと決め込み、我執と突進のみを續ける者は慢心者である。キリストも、直き心の持主を繰返し、繰返し「幸なる哉心直き者よ！」と賞め讃へたのであつた。人若しその心直ければ常に反省の心を失はぬであらう。しからばその反省とは何を基準として量り、顧みるであらうか。或る人は「善」であると云ふかも知れない。しかしそれも良いであらうが「善」だけでよいであらうか。それならばその「善」とは何であるか。又或る人は云ふであらう。「眞」とは何をもつて「眞」とするか。又、或る人は「美」であると云ふ者もあるかも知れない。その他、良心とか、神とか佛とかいろいろの基準を擧げることが出来るであらう。だがそうなるに、その基準そのもの、本質如何といふことが問題となりはしないであらうか。

そのやうな複雑多岐な基準は、基準そのもの正しき認識から出發しなければならぬ。そこで私は何をもちて私の反省の基準となすべきか、これが自己の本質を正しく見究める上に最も大切なことであらうと思ふ。自己反省の鏡について私は次の如く考へる。

凡そ宇宙の絶對とも稱すべき「眞」と、「美」と、「善」との三面が存在すると思ふ。この眞、善、美の三面が具足して一體となし得たならば、これをもつて、眞に吾人の反省の明

鏡となし得るではなからうか。この三面具足の三位一體の本體を究盡せんとすることこそ、これ最も自己を正しき道に歩ませやうとする最も強烈な自省心と、向上心を持つた者であり、眞に自己を愛する者であらうと思ふ。私は今、假りにこの三面具足の本質を把むことを「悟」と名けておこう。この悟とは迷に對する言葉である。それ故に、迷があるから悟があり、悟りの境地があるとすれば當然又その反對境地も中間境地もなければならぬ。要するに、客觀的にも主觀的にもこの世の中は「悟」と「迷」の二面に歸結するとも云へやうされば天台大師はこの理を圖示して、



といふやうに述べられたやうであるが、この表示は現在の私の宇宙觀乃至人生觀確立の爲めに、非常に多くの暗示を與へて呉れたのであつた。

私は今日まで、自己を眞に正しい道に歩ませんとし常に努力して來たのであつた。だがしかし、私はたゞ科學にのみ信頼し、科學的眞理のみを求め、そのみを追ふて生きんとしてゐたのであつた。そこに私の誤りがあつた。私は自分の

行爲に就いて、常に強く反省はして來た。だがしかし過去の私の反省の鏡は、三面具足の明鏡ではなかつたのである。たゞ眞のみの一面的な歪める鏡であつたのである。それが自己の行爲が正しいものと信じつゝ、思はぬ邪道に歩み入つてゐたのであつた。あらゆる物質の成生、結合、分離等の運動法則、この法則の外面的な、形式論を基礎として考へ出されたる社會科學を、私は眞理なりと考へ、人間の精神なるものは、この外界の物質界の反射的所産であると思つてゐたのであつた。それであるから社會に起る種々なる現象の反映が吾人の心理に作用し、そして意識を決定する。人間はそれにして、勇敢に、忠實に行動することが社會正義であると考へた。この考へ方は一應正しいと思ふ。しかしこれは一面的の正しさであつて、眞の正義觀ではなかつたのである。

人間は光明を欲する。光明を欲することは人間の本能のやうである。人間が暗いところより、明るいところを好むのは事實である。それは眞實である。だがしかし、人間の光に對する欲求は、單に明るいといふだけでは満足ではない。たゞ眞理のみが人間の欲求するところであるならば最大の光力をもつた電燈などは、人間の光明に對する欲求と合致しなければならぬ。それであるのに人々はガス入電球を愛する。或は蠟燭の光を愛し螢の光を賞で、おぼろ月をさへ愛する。これは何が故であらうか。それは、それ等の光の持つ美しさを

愛するのである。光の美に對する欲求から来るものだ。この光明の二つの方面、即ち光力と美感との合致した時に、私達は光に對する最高の喜びを感ずるであらう。人はそれを心から善い光として感じそれを愛し喜ぶのである。この善い光とは、即ち三面具足の光である、あらゆるものが、この眞と美と、善の三面が具足してこそ至上のものとならう。

人間にも光がある。人間の光とは即ち人格である。人格なるものも、やはりこれと同一の原理によつて、規定されねばならぬと思ふ。しかも人格とはその人の思想と、行爲の全表徴である。

この眞善美の三面を人格化し、人間の行爲の規範として實踐し、表現し得る人は、實に、人類の師表として、仰がるべき偉人であらうと思ふ。私達が、かゝる原理を認識するや、誰しも自らも又その師表たるの人格を自己の行爲の上に體現せんと欲せぬ者はないであらう。おそらくこれは人間の至情である。そこに自己の正しき反省が起り、又正しき反省の基準が確定される。

至める鏡に對しての自己反省では、眞の反省とは云ひ得ない。私の鏡はまづたく歪んで居つたのであつた。そのことに気が付いた時私には深い悔恨があり悲哀があつた。

マルクスは社會の構成と、その變化の法則を明らかにしてそしてこれを社會科學として大成した。これが即ちマルクス

主義である。この社會科學なるマルクス主義は、丁度水を科學者達が

II, 10, 16

と規定してゐると同様の正しさを持つてゐる。これも眞である。だがしかし魚は水に住むといふ。それならば水素二と、酸素一によつて出來た水の中へ魚を入れて飼ふたならば、果して彼等は充分に成長し、繁殖するであらうか。私はそこに科學萬能主義に對する一つの疑問をもつて來たのである。魚をして生々と成長させることの出來る水は、法華經法師品第十に

『高原を穿鑿するに、猶乾燥せる土を見ては水を去ること尙遠しと知る。漸く温へる土泥を見ては決定して水に近きぬと知らんが如し。』

と説かれてあるやうに、かやうにして得た所の眞實の水にし、はじめて魚が生きられるであらう。又極樂淨土の浴地に充滿してゐるといふ、八功德水も勿論娑婆世界の魚の生きられる水ではあり得ない。正しき認識と眞實の理解のないところに、眞の幸福はあり得ない。ほんとうに日本民族の傳統的精神が正しく理解出來ず、又日本國體といふものが正しく認識出來ないでどうしてそれ等の偏見者達の手によつて、日本人の眞實の幸福を招來することが出來よう？ それでどうして幸福と平和とに満ち々々た樂園が作られやう。

草や木の葉は緑色である。緑といふ色は青と黄とを混合すれば出來るのである。だが、こゝにいふ緑は化學者の處方による緑である。これは緑色を作る公式とも云ふべきものである。だがしかし、こゝに一人の畫家が居つて、草花か、或は緑の葉の生ひ茂つた樹木を寫生してゐるとする。この時に、この美術家は、青と黄だけを混合して緑を作つて、それを彩色するであらうか。若しもそうならばこの緑色はどうであらう。大自然のあの落付いた緑とは、ちつとも似つてゐないことに気がつくであらう。この美術家が、ほんとうに自然を見つめて書くならば、彼はまづたくこれとは色素の變つてゐる一滴の橙褐色を入れる秘密を忘れはしないであらう。そうするとこの緑色こそ落付きのある明るさと、生々とした自然味のある、シツタリとしたシツタな美しい緑が生れるであらう。この一滴の橙褐色の秘密こそ、自然を見つめた人によつてなくては見出せなかつた色素であつたらう。

又、世の中には俗に「獨つても鯛」といふ諺がある。これは鯛の味の優れてゐることを言つた言葉であらう。だがしかし、こゝに一人の料理師があるとする。そして彼が今、料理を作る。そしてその味自慢の鯛を使ふとする、彼はこの味の優れた鯛の傍へ一枚の熊笹を添へることを忘れない。だが誰もこの熊笹を食べる人はないであらう。しかもこの熊笹の葉一枚によつて、どれ程鯛の味が良くなるであらう。鯛の味には

少しも變化があるものではない。しかもこの不用の如く見える熊笹の葉一枚がまづたくこの料理を生かしてゐるではないか。この熊笹の葉は、單に、淡泊な鯛の味が他の料理の香や味と接觸しないやうにする爲めだなどと功利的に考へる者がゐるならば、共に鯛を食べて舌鼓を打つことの出來ない哀れなものである。この不用の如き、食べられぬ熊笹の葉一枚添へてある處に、何とも言はれぬ清新の氣分をたゞよはしてゐるではないか。これが料理の調和美とでも云ふのであらう。西洋料理にだつて青豌豆やパセリがつく。しかしそれにはどこか功利的な技巧が感ぜられる。そこへゆく日本料理の熊笹の青葉には、何とも云はれぬ虚心坦懐さを感じさせられる。こゝが日本民族の本領なのだ。

汁粉は甘い方がよい。だが甘い汁粉を作るには、甘い砂糖ばかり使つたとてほんとうの甘味は出て來ない。それにはたつた一つまみのからい鹽が必要である。實際社會も、やつぱりそのやうなものである。理論だけで出來上つた理論偏しい社會に、ほんとうの平和があるであらうか。眞の平和のないところに、人間味のあるほんとうの幸福といふものがあるであらうか。私は複雑な社會の現實を、單純化したマルクスの理論によつて解釋し、その公式によつて妄信的に行動する前に、もつと手近な現實を見つめてから、實行しなければならぬのであつた。

非滅現滅の夕

磯部満事

数日前、我が紀元の佳節に際して、明治神宮外苑附近に於て一つの出来事が發生しました。それはある疾走せる圓タカが、今しも市電から下車して向ふ側へ横断しようとした一婦人の外套にドアの柄が強く突入した爲めにアツヤと云ふ間もなく數回曳きづられたかちたまりません。この無様なる奇禍、不幸一日経つた翌十三日朝、赤十字病院で遂に不歸の客となられたのでありますが、この婦人は未人ムーン嬢、嬢と申しても五十三歳の女史で、大正二年から先頃迄青山學院の教師をされ、多くの學生から姉妹の如く敬慕されつゝあつたさうです。而して圓タカの運轉手は館野といふ二十二歳の青年でありました。

これだけならば世間に往々かゝる變事はあつて別にこゝに特筆の要はありませんが、そのムーン嬢最後の言葉を深く味びたいのであります。曰く

今日二月十五日、大聖釋尊の御涅槃の聖日當り、私は千年よりも一段と強く佛陀の大慈悲に感泣せしめられます。死の教誨の如何に鴻大尊貴なるかは、凡聖を通じてのこゝてはないでしようか。

かの波婆城の純陀が、自分の排たげ御供養で、世尊が滅を現じ給ふやうになられたことを痛恨した時に、釋尊は心優しく之をいたはり、汝が如来に最後の食を供養した功徳は、初め自分が苦林から起つに時乳糜を施した者の功徳と等しい、この功徳を以ての故に次に當に佛果を得るものであるとの仰せは、これも單に純陀一人の成佛の便りだけではありますまい、誰か其の慈念に感憤興起せぬものがありません。

さあれ釋尊が五十年の長い間其の身、口、

私のかうした死は、皆神様の思召です、どうかアノ青年運轉手を罰しないやうに警察へ運動して頂きたい。アノ人は運轉手になつて未だ日も浅いさうです、ですからコソナ事故を惹起したのでしよう。これは死ぬる私よりも、その原因を造つたアノ人の方が餘計に苦んで居ると思ひます。又アノ人は貧しいさうですから、若しも免狀を没收されたら、營業を停止されたり、又裁判の結果懲罰でも受けるやうなことがあつては誠にお氣の毒で、私は死にきれません。どうかアノ人が無罪になるやうに皆さんで運動して下さい、それから萬一失業するやうなことがあつたら、私の親しい人々の間に銀行家も、貿易商もありますから、何處かへ誰か責任をもつて就職させてあげて下さい、これ文のこゝを請合ふと斷言して下さい、私は安心して死ねません。

と、枕頭に集まつて居た親友や、弟子達は一同嘆へ難い感涙に咽びつゝ、夫々の責任者へあげて、それ等を請合ふべく誓つたものですから、女史は安詳として、神の御名を唱へつつ清らかな臨終を全ふせられたといふことでした。この場合ムーン嬢は最早一婦人の資格ではなかつたでしよう。自ら合掌せざるを得ませぬ。嗟。

其言即成に於て提婆菩薩が、波羅門弟子の爲めに、「汝口を以て我を伏す、我力を以て汝を伏せん」と、偶々菩薩が獨り禪から起て經行する隙に乗じて腹筋を刺しました。其時に菩薩は、「是れ我が先業の害する所である汝問道より早く遁れんば必ず我弟子に殺せん」と嘲かも之を憎悪することなく、却て迷路を教へたといふことを追憶致して、今このムーン嬢の態度を一層深く感服せしめられます。

重三輪の妙化によつて、上は大國の王より、下は一老婆に至る迄無量の人、天、四衆が救護されたのでしようが、猶將來に於て増上慢の者、不信佛法の者、良心を痛痺せる者等々不慧の群生類を、どうかして正心に純良なる者に、佛子の自覺に立ち還らしめてやりたいものと、永遠の人類救済の悲願の下に體系的法化を遺し給へるものがアノ法華經一部特に如來壽量品であります。

如來壽量品は、釋尊の自ら其本地を開顯遊ばされたもの、一切經中の魂魂であることば申す迄もありませんが、同時に其佛様の徹底せる大慈大悲の有様が、神通之力が良醫の聲によりて開示されて居ります。即ち釋尊の慈眼の眸は、私共の本心を失ひ、哲學、道徳を無視し、科學萬能にこびりつき、唯物思想に執着し、經濟第一義を振り廻したり、或は人の道に満足したり、天上来に誕生するを最後の喜ぶしたりする者共に、慈父の客死といふ強烈な刺戟を以て、私共の反省自覺を促し以て、根本的救護の御手が伸べられたこの大事實こそ、一切經を通じて最も絶大無價の寶珠と拜讃するものであります。日蓮聖人の三大誓願も遂に此所から根ざしてゐることを拜察

されます。それは眼前のムーン嬢の死の教訓よりも、提婆菩薩の最後よりも、近くは本多上人、兒玉上人の御臨終の示現よりも、更に偉大なるものであることを直感致す次第であります。眼前の事柄に熱上して、遠きに憶想すること薄きは、智者の迫る道ではありますまい、宜しくこれ等を通して御佛の限りな御慈悲に彌々感激を新に致したいと存じます。

四月八日は、釋尊の御降誕聖日として各地に年毎に盛大な花まつりが營まれて参りましたことは實に御同慶に堪えませぬが、私はより以上にこの御涅槃の夕を憶び、心靜かに其の教恩、最終絶大の御慈願に聊か報恩の微衷を捧げたいのであります。 合掌
南無妙法蓮華經

(一〇、二、一五、朝の勤行を記して)

大八木義雄

開目抄讀後に

佐渡か鳥血をや硯にたらしつつ 書きたまひけむふみの尊とさ

過 去
ゆふやみの空にきらめくいなつまの 今といふまに昔とそなる

現 在
ありてなほなきに等しき今といふ 人のこの世を花火にそ見る

未 來
この土をわしのみ山とおもふわれ 花のうてなは夢にたに見ぬ

法華經講話

(第十五講)

小林一郎

妙法蓮華經序品第一 (承前)

今日は序品の終の偈のところから読みます。

爾の時に文殊師利、大衆の中に於て、重ねて此の義を宣へんと欲して偈を説きて言く。

(爾時文殊師利、於大衆中、欲重宣此義、而説偈言)

今までのところで、文殊菩薩が、過去のことを想ひ出して、佛の教を學ぶその學び方には、大體定まつた道がある、又佛が教を説かれるにしても、その説かれる順序は大概定まつて居る。であるから今この釋迦牟尼佛も亦世の中に出られて、己に四十何年

の間教を説いて居られるので、今度は愈々自分の覺り得た所をその儘に打明けて説かれるであらう、といふことを申して居ります。その事を繰返して、モウ一層印象を強める爲に、偈を説くといふのであります。

我過去世の 無量無數劫を念ふに

佛人中尊有しき 日月燈明と號く

世尊法を演説し 無量の衆生

無數億の菩薩を度して 佛の智慧に入らしめた

まふ

(我念過去世 無量無數劫 有佛人中尊 號日月燈明 世尊演説法 度無量衆生 無數億菩薩)

過ぎ去つた世の無量無数劫といふ数限り無いところの非常に遠い昔の事を考へて見ると、その昔から佛様が居らつしやつた。その佛は人中の尊といふから總ての人間の中に一番尊い方でありまして、さうしてその佛様の名前を日月燈明と號けて居つた。日月燈明といふのは、つまり佛の智慧が一切の人の心を照すといふ意味で、日だの、月だの、燈明の光などに譬へたのであります。さういふ名前の佛が居らつしやつた。世尊といふのは佛様であります、佛様が教をだん／＼と説き分けられて、数限り無いところの大勢の人間、また数限り無いところの菩薩を度したまふ、度すといふのは迷ひの中を通り抜けて覺つた境界、即ち佛様の境界にまで到達せしめるやうに教を説かれた。さうして結局は佛と同じやうな智慧を具へるやうになつた。

智慧といふことは、普通俗語で「あの人は智慧の

いろ／＼に物が異ふ、又いろ／＼變つて行くといふことを確り見る力です。さういふやうに考へれば總ての物皆異ふのであります。その異ふ物を纏めて見ると、その中に共通な所が見付かつて来る。それがこゝに平等或不變化といふ事で、佛敎の専門の言葉で言へば空と言ふ。空といふのは結局變らないものといふ事で、幾ら變つても變らない物がある。その變らない物を確りと捉へるといふことが、所謂空を知る力といふやうに言はれるのです。空と言つても何にも無くなるといふことではない。例へば此處に皆様がお在でになる。見ると顔つきが少しは異ふ、又これが同じだつた日にはチョット見別けが附かないから困りますが、皆幾らか異ふ。併し異ふと言つてもまるで異ひはしない、大概上の方に眼があつて、真ん中に鼻があつて、下の方に口がある。これは同じです。線級が良くても悪くても、額の真ん中に口のある人などはありはしない。異ふと言へば

有る人だ」といふやうなことを言ふのであります。が、智と慧といふこと、これは分けて考へれば考へられる。

智一有—差別—變化—分析
慧—空—平等—不變化—綜合

智の方は有を知る力、慧の方は空を知る力だと言はれる。有といふのは差別であつて、又別の言葉で言へば變化です。空といふのは平等であつて、別の言葉で言へば不變化です。智慧と一口に言ひますけれども、若しこれを別けて言へば、智の方は物を細かに知り分ける力、慧の方はそれを纏めて行く力、又當世流行の言葉で言へば、智の方は分析であり、慧の方は綜合であるとも言へる。前にも言つたやうに世の中の物は異ふといへば皆異ふ。同じ物は一つも無い。樹の葉一枚だつて、全く同じ色で同じ形であるといふものは無い。皆異ふ。その異ひを詳しく見極めるといふはたらしさが智である。即ち差別、變化

異ふ、併しまるで異ふのではない、大體に於て同じ所があるでせう。即ちその異ふのは差別であつて、同じだといふことは平等である。又異ふのは變化であつて、同じことは不變化である。その兩方を見なければいけない。異ふと言へば皆異ふが、その中に變らないものがある。變らないと言つても、たゞ變らないといふのではない。その變らないものがある。いろ／＼に分れて、變つて現れて来るのだ。斯ういふやうに兩方見なければいけない。馬鹿な者もあり、懶口な者もある、これは變化である。金持もあり、貧乏人もある、これは差別である。けれども金持だつて貧乏人だつて、馬鹿だつて懶口だつて、人間と言へば同じ人間である。これは平等であり、不變化である。兩方見なければいけない。同じ人間だから、同じに取扱つて宜いとばかりは言へない、それは又差別的に取扱はなければならぬ場合もあるでせう。ですから、異ふ方は異ふ方として確かり見極めて、

それから又その異ふ中を一貫して居る變らないものは變らないものとして、確かりと見て行く、といふ事が必要です。偏つてはいけません。何でも異ふのだからといつて、みな人間を一々差別的に待遇して居たのでは、決して世の中といふものは平和になりはしません。かといつて、皆同じやうだから同じに扱つたら宜いといふやうな、そんな無頓着なことでは決して世の中の事は善く行かない。いつでも異ひを認めて、而もその異つた中に異はないものが貫いてあるといふことを知る。斯ういふ事が必要でありま

す。
前にもチヨット話しましたが、これは親が子供を育てる時に一番能く現れる。子供は幾人生れたつて子供だから同じやうに可愛い。母親は子供を見ること平等であります。五人あつても八人あつても皆自分の子供だから同じに可愛い。どうぞこの大勢の子供が同じやうに幸福に育つて呉れ、ば宜いと思ふ。

て變らないところの共通の性質の有ること、それを確りと見透す力、それが慧の力です。併せて智慧となる。これが片方缺けてはいけません。俗語で言へば「あの人は智慧の有る人だ」と言つて一口に言つてしまひますけれども、本當を言へばこれは兩方に亘らなければならぬのです。この事は、前に少し申した事でありますが、茲にモウ少しハッキリその事を言つて置きます。

そこで佛の智慧に入らしめる。佛様といふものは一切の人間を皆平等に見て居らつしやるけれども、教を説く時にはその人その人の各々の力に應じて、愚かな者は愚かなやうに、賢い人は賢いやうに、それ／＼適切な教を説かれる。それが智と慧でありま

四〇
けれども同じ物を食べさせて同じ物を着せるのではない。上の子供はモウ十八だ、下の子供は二つか三つだといふ時に、上の子供の着るやうな着物を下の子供に着せたら引摺つて着られない。同じに可愛いけれども、大きい者は大きいやうに取扱はなければならぬ。小さい者は小さいやうに取扱はなければならぬ。上の子供は十八だから、お刺身や饅頭の蒲焼やピフテキを食べさせれば喜ぶ。けれども下の二つや三つの子供に蒲焼やピフテキを食はせれば、腹を下して死んでしまふ。だから可愛いと思つたら、大きい者は大きいやうに取扱ひ、小さい者は小さいやうに取扱ふ、それが本當の慈悲であります。本當に可愛がることである。「面倒くさいから皆同じ物を食はして置け」といへば、下の子供は死んでしまふ。それは慈悲でもなんでもありません。斯ういふことを考へなければならぬ。その異ふ方を飽迄見透す力、それが智力であります。その異つた中を一貫し

佛未だ出家したまはざりし時の 所生の八王子
大聖の出家を見て 亦随ひて梵行を修す

(佛未だ出家の時 所生八王子 見大聖出家 亦随修梵行)

その佛様が未だ出家せざる時、まだ普通の生活を居らつしやつた時に、生んだところの八人の王子があつた。大聖(その佛様)が出家して、教を説くことを主にして、残つた生涯を送られるといふことを聞いて、その子供達もその佛様に随つて、梵行を修すと言つて淨き行ひを積んで行つた。

「梵」は清淨といふことでありますが、清淨といふことは、別の意味では私を去るといふことであります。自分の勝手を捨てるといふこと、それが清淨といふことです。皆が「俺が／＼」と思つて居つた日には、言ふことでも爲すことでも皆濁つてしまふ、自分の私を捨てなければ、決して清淨といふ行ひは出来ませぬ。親が親の事ばかり考へた時に於

ては子供と衝突する。親が自分を捨て、子供の事を考へてやる。子供も自分を捨て、親の事を考へるといふ時に、お互ひの衝突や我儘は無くなつて、その間の行ひが淨い行ひになつて来る。いつでも清淨といふことは私を去るといふことです。自分の勝手に執着して居る間は、いつ迄経つてもいけない。梵行を修するといふことは淨い行ひをやること、淨い行ひといふことは、自分の我儘を捨てる修行をするといふことです。それがマア佛教の入口であります。皆自分の勝手を捨てるといふ所から修行が始まつて行くのであります。自分がうまい事をやらうナシと思つて居つた日には、修行もナシも出来るものではありませぬ。そこで淨い行ひ、自分の我儘を捨てるどころの修行を致します。

時に佛大乘經の 無量義と名くるを説き 諸の大家の中に於て 爲に廣く分別したまふ

(時佛説大乘經名無量義一於諸大家中一而爲廣分

ころの善い行ひは何處から出るかと言へば、心一つから出る。心一つが確りとして居れば、その場合場合に應じて皆適當な事が出来るのでありますから、それを説くのが無量義經であります。無量義經のことは今は講義致しませぬけれども、要するに無量義經の趣意はそれです。數限り無いところの善い行ひは皆一心から出るのだ。心一つが間違へば皆駄目になつてしまふ。心一つを確り建直して行けば、その一つの心の中からも善い行ひでも出て来るのだ。斯ういふ事をお説きになるのが無量義の教です。その無量義と名けるところの教をお説きになつてさうして大勢の人間の中で爲に廣く分別したまふ。「分別」といふのは、對手の人の理解の出来るやうに細かく説き分けることを言ふ、これが必要である。どんなに善い教だつて力に合はなければ仕様がなから、そこで對手に應じてお説き分けになつて、それ／＼の人にわかるやうに、又それ／＼の人に實行

別) その時に佛様が大乘の教をお説きになつた。大乘といふのは、教の中に小乗といふ小さい低い教と、大乘といふ高い教とあるが、その高い方の教をお説きになつた。その教は無量義と名けるものであつた。無量義といふことは、前にも申したやうに、數限り無いところの善い行ひは心一つから出るといふことが無量義であります。

「無量の勝義は一心より出づ」 勝義といふのは非常に勝れた善き行ひ、善き心懸けそれが親に對すれば孝行となり、御主人に對すれば忠義となり、妻子に對すれば慈悲となり、友達に對すれば眞實となり、國に對しては愛國的の行ひとなる。省これは勝義です。最も勝れた行ひです。その事は口で言つたつて言ひ盡せないでせう。場合がい／＼違つて來れば、その場合々々に應じて一々善い行ひをしなければならぬが、その數限り無いと

の出来るやうにされるのであります。そこでこの經典といふものは佛様の教を書き寫したものであります。その經典を讀む場合に於てやはりその考がなければいけない。私共は佛様に面りお出會ひ申して教を受けることは出来ませぬから、佛様の教を、斯ういふ文字に表はした經典を通して、丁度佛様に親しくお眼に掛つたやうな氣分になつて、自分の修行をするのであります。即ち經を讀むといふことに依つて教を求めないのであります。所が經を讀むといふことにどういふ讀み方があるかと言へば、次のやうな三種の讀み方がある。

- 口讀
- 心讀
- 色讀

先づ第一は口に讀む、これは譯でもやつて居る。法華經なり、阿彌陀經なり、觀音經なりをベラ／＼讀んで居る。これはマア譯でもやつて居る。これも

決して無益ではない、口でやつて居る間に自然々々にさういふやうな気分が出来ますから、これは随分尊い事です。併ながら口で読んで居るだけで事足るとは言へない。だからこれを読んで居る間にその意味がわかつて、わかつただけではいけないから、心で信する、これは尊い教だと言つて、確りと自分の心にそれを捉へて信するといふことになりますと、それが所謂心讀になる。心讀しなければ何にもならぬ。口で讀むのは誰にも讀める。けれども口で讀んだだけではいけない。心で讀む。心で讀むといふことは、讀んで理解してそれを心で信する事でありま

す。所が心で讀むだけではまだ足らない。人間は一緒に集まつて國家を造り、一緒に集まつて社會を作り町や村を作つて居るのですから、自分一人覺つたか

らといつて、他の人を放つて置いたんではその覺つた效が無い。そこでどうしてもこれは行ひに現して中に出る書物を皆讀む譯に行きはしない。だから澤山讀んで偉くなるといふことなら、これはモウ御免蒙る方が宜しい。幾ら讀んでも讀み盡せるものではない、さういふことはつまらぬ事です。足利時代に太政大臣をやつた人で一條兼良といふ人が居りました。「『かれよし』と讀むのでせうが俗に『かれら』と言つて居ります」太政大臣、關白までやつて隠居したのでありますが、大變な學者で随分世間の信用を得た人でありました。その人が嘗て語つて言ふには「世間では、日本の學者の中で、菅原道眞は菅公と言つて非常に尊敬して、天神様といふ社を造つて祀つて居る。併し自分から考へればたわいない話である。自分の方が餘程菅公より偉い、今斯うやつてお前達の前に生きて居るものだから、俺がつまらぬものと思ふか知らぬが、俺の方が餘程菅公より偉いのだ。それは三つ偉い事がある、菅原道眞は右大臣で終つたが、俺は太政大臣關白にまでなつたから

周囲の人を感化する、周囲の人を同じ方に導いて行くといふことをしなければならぬ。茲に於て色讀といふことが必要になつて来る。「色」といふ字は身といふ意味で身に讀む、身に讀むといふのは實行すること、だからどうしても心讀、色讀をしなくてはいかぬ。心に信じ、身に行ふといふことが出来なければ、幾ら讀んだ所が、それはまるで無益とは言はぬけれども、大した役には立たないのです。何萬巻の書を読んでも、口で讀むだけでは大した力にならない。僅に一行か二行の言葉であつても、これを心に信じ身に行ひますれば、それは非常な大きな力になるであります。

殊にこれから後の複雑極まる世の中になりますとこの點に注意することが肝要です。書物ナンといふものは後から幾らでも出来る。世の中に出る書物を皆讀む譯には行かない、どんなに根氣の良い人だつて、朝起きるから夜寝るまで讀み續けたつて、世の

俺の方が偉いちやないか。菅原道眞は筑紫に流されて、筑紫の田舎で終つたけれども、俺は都で斯うやつて繁昌して居るから、俺の方が偉い。それから菅原道眞は大した學者であつたけれども、菅原道眞が死んでから今までモウ四百年にもなるが、死んだ後の書物は讀めないであらう、俺は道眞が死んだ後の書物を皆讀んで居るから、俺の方が偉いちやない。か。この三つの點に於て自分の方が道眞より優つて居る、だからお前達は天神様などを拜むより俺を尊敬した方が宜い」といふことを言つた、これは冗談半分と言つたのかも知れませんが、マア他の事は置いて問はず、第三の箇條は尤もです。昔の人の死んだ後に出た書物は、後の人ばかりが讀めるのだから、成程偉いと言へるでせう。けれども今日どうですか、菅原道眞といふ名前を知らない人はないけれども、一條兼良といふ名前は、ヒョットしたらあなたの方の中にも、今日此處にお出でになるまで知

らない人があつたかも知れぬ。さうすると道眞の死んだ後の書物をいくら読んで何にもならない。後世になつて見れば、やはり道眞の方が皆に知られて居り、尊敬せられて居るのであります。

此の事實を見てもわかるやうに、澤山書物を読んだから偉いといふものではない。若しさうであるならば、昔の人よりも、後で生れた人の方が偉い譯ですけれども、必ずしもさうではない。澤山知るといふことは、ナニも偉い事ではない。澤山知つても、たゞ知つただけでは仕様がなない。それを心に信じ、身に行つてこそ、たゞ僅かな事でも大きな力になる。斯ういふ事を考へなければならぬのであります。人に依りますと、だん／＼書物を読むとだん／＼馬鹿になる人があります。あまりいろ／＼な物を読むとわからなくなつてしまふ。だから澤山読むといふことは、悞口になる道か、馬鹿になる道かわからない。今日私は一日家に居りましたが、人が来ていろ

に基いて居るので。その人だけの意見ではない。「何といふ學者が斯う言ひました」と兩方とも言つて居る。これではどつちが善いのかわからなくなつてしまふ。前の學者の説に従へば、一滴も飲まぬ方が長生が出来ると言ふ。後の學者に従へば、少しは飲んだ方が長生が出来ると言ふ。どつちだかわからなくなる。マア酒などはどつちでも宜いやうなものですけども、ウツカリするとさうなりませう。或る人の言ふこと、他の人の言ふこと、異ふ。どつちもそれ／＼尤もだ。だからあまりいろ／＼な書物を読むとわからなくなつてしまふ。結局「それではどれもこれも皆止めてしまへ」といふことになる。自分の頭で判断することをしなければ、たゞ徒に多く知るといふことは役に立たない話であります。これは餘計な話をするやうでありますけれども、皆様方は斯ういふ會へお集りになつて、いろ／＼書物をお讀みになつたり、人の話をお聴きになつたり

いろ話をしました。私は面白いと思つた。朝早く来た人は基督教の信者で、モウ絶對の禁酒論者です。酒を一滴飲んでも身に悪いと言ふ、「あなたはどうです」「僕は時々飲む」「それはいけません、あなたはもうも教を説くナンといふ人が、酒などを飲んでどうなさるか、酒は一滴飲んでも身に悪い、教を説かうと思ふなら一切お廢めなさい」と非常に熱心に言ふ。私はこれは親切に言つて呉れると思つて感心した。所が午過ぎにやつて来た人は「あなたはどの頃どうです、身は……」「大分丈夫だ」「あなたは酒は飲みますか」「飲みますかと言はれると困るが、時々飲む」「それは結構な事です。酒といふものは非常に榮養分があるので、あれは度を過してはいけないけれども、適度に飲めば洵に宜しい。あなたの顔を見ると大分元氣だが、飲んだ方が宜いですよ」と言ふ。一日の中に、前の人は一滴も飲むなど言ふ。後の人は時々飲めと言ふ。それが皆學者の説

するから、私は特にその事を申し上げて置きますが、自分の頭腦で確り判断するといふ力の無い人は、幾ら大勢の人の言ふことを聽いても大して役に立たないのです。何故ならばその教そのものが矛盾します世の中が複雑になると尙更さうです。現に私一人が私の子供に言ふことが矛盾する。私は子供に言つて聽かせる。お前はまた年が若いのだから、年のいつた人は勞る心持がなければいけない。自分が先に立つて、年のいつた人を後に押退けるナンといふことはいけないぞ、成べく他の人を前へやつて「マアあなたお先へ、お先へ」と言つて、自分は後から行く、この位な心持がなければいかぬ。斯う言ひますと、子供は一通り尤もだと思つて聽いて居ります。それから又他の時に、お前は學生だから約束を守らなければならぬ。殊に時間の約束などは違へてはならぬ。七時と言つたらキツト七時、八時と言つたらキツト八時に行かなければいかぬぞと言ふ。これも

子供は尤もだと聽いて居る。所がその子供が、日曜日に友達と一緒に千葉縣の方へ行くので、兩國橋で朝七時に出會ふ約束をして、新宿で電車に乗らうと思つた所が、電車が満員で乗れない。親父が言ふには、お前は若いんだから先へ立つな、成べくならばお先へと言つて自分は後に退つて居れと言ふから、親父の言ふやうにやると到頭電車に乗れない。七時には間に合はない。そんなら乗れなくても宜いけれども、親父が又言ふのに、お前は學生だから時間は重んじろ、約束を守れと言ふ。約束を守らうとすれば人を突き退けなければ乗れない。どうも親父の言ふことはわからない。親切にしようとするれば約束は守れない、約束を守らうとすれば親切は出来ない。どうしよう。そこで「要するに親父の言ふことは當にならない。兩方止めてしまへ……」となる。一概に若い者が悪いのではない。世の中が複雑ですから一方の教を守らうと思ふと一方の教が守れない。一

方の教を立てようとするれば一方の教が立たないといふことに始終出會ふのです。

それだからその矛盾し衝突するやうな教を捉へて今の場合に於てはどれに従ふ方が宜いかといふことをきめるには、それは自分自身の判断力に依るより外ない。自分自身の判断がグラ／＼して居るならばどんな善い教を聽いたつて役に立ちはしない。何故ならば教そのものが衝突し矛盾するからです。そこで一心といふことが必要になる。佛様はいつでも、心一つだと教へられる。お前の心一つに於て確りと考へなければいけないぞ、餘所から言ふことはいろいろな事があるのだから、そのいろ／＼な事が皆一致すれば宜いけれども、教はよく矛盾することがある。こつち立てればあつちが立たないといふことがある。その時どうするか。その時は自分が確りと考へて、孰れに従ふべきかをきめなければならぬ。そのきめるには、その時に慥て、騒いだつて仕様がな

いから、平生に能く修行して、平生に於て心を落着け考へて、さうしていざといふ時になつて健全な判断の出来るやうにしなければならぬぢやないかといふことを言はれるのであります。

それが、無量の行ひは一心から出るといふことで、數限り無い善き行ひ、それは自分の心の中からお出るより仕様がな。心一つがグラ／＼して居つた日には、善い行ひをしようと言つたつて到底出来ないのであります。それが無量義といふ經の意味であります。佛様は大勢の人々の中に於て、數限り無いところの善き行ひは皆一心から出るといふことを説かれて、心の土臺を養ふことを教へられたといふのであります。

佛此の經を説き已りて 即ち法座の上に於て

跏趺して三昧に坐したまふ 無量義處と名づく

(佛説此經已 即於法座上 跏趺坐三昧 名無量義處)

これは前にも申しましたが、一體人間が教を説くといふ場合に於ては、説く前に能く考へて、説いてから又考へなければいけない筈です。説く前には、大勢の様子を見て、この人々にどういふ教を説いたならば本當に心の底に入るかなといふことを靜かに考へて、それから説く。説き已つては、今一通り教を説いたが、この教が皆の心にどういふ風に入つて行つたらう、それがどんなはたらきをしたらうといふことを、靜かに考へて見ることが必要なのです。だから佛が教を説く時には、説く前に三昧に入つて靜かに考へる。それから説き已つて三昧に入つて又靜かに考へる。さうしてその教が出来るだけ役に立つやうに、出来るだけ大勢の力になるやうにと工夫されるのであります。これはさうあるべきです。所が世の中が忙しいものですから、佛様どころではない吾々のやうな凡夫が教を説くにも、忙しいものだから考へて居る暇が無くて、汗を拭きながら駆けつけ

ていきなり喋つて、中途で止めて、「モウ一つ他に約束があるから」と言つて飛出したりする。これは善くないことです。そんな事で本當に道がわかる譯のものではない。差しいことであります。

佛は今無量義といふ教をお説きになりまして、さうして足を組んで静かに考へて今教を説いたことがどうぞ皆の心に徹底するやうに、どうぞ皆が深く信じて行つて行くやうにと祈念されました。静かに考へて居られました。その状態を無量義處と言ふ。無量義の心を以て静かに落着いて居られる状態であります。

天より曼陀華を雨し 天鼓自然に鳴り
諸の天龍鬼神 人中尊を供養す

(天雨曼陀華 天鼓自然鳴 諸天龍鬼神 供養人中尊)
その時に天よりは曼陀羅華といふ蓮の華が降つて、天上界の鼓が自然に鳴つたといふ。これは天地共に

一切衆生の 生死の業報處を示したまふ
(此光照東方 萬八千佛土 示一切衆生 生死業報處)

その皆の眼に見えるのはどんな事であるかといふと佛の額から出た光が、東の方の萬八千といふ澤山の土を照して、一切の人間の生死業報の處を示すといつて、すべての人間がどういふはたらきをしたならばどんな結果が来るかといふことを、佛がお示し下される。業といふのは自分の爲すところの善い事、悪い事一切の行ひです。どうも從來この言葉が間違つて世間で使はれて居りまして、業ナンと言ふと、悪業といふやうな悪い方に主に使はれて居りますけれども、本當の意味は業といふものは人間のする行ひですから、口に言ふこと、身に爲すことが皆業であります。その業には善も悪も両方ある譯です。そこでその業に依つて報がある。その結果が現れる。その業と報との關係は、一刻々々に考へなければい

佛の教を感激した意味を表はすのであります。さうして諸の天龍鬼神といふやうなものが人中尊(佛様)に御供養を申上げた。供養といふのは感謝の心持を表はすことで、ア、有難い教を伺ひました。この教に依つて大勢の人が必ず救はれ、必ず教へ導かれて居るであらうといふ心持を表はしました。

一切の諸の佛土 即時に大に震動し
佛眉間の光を放ち 諸の稀有の事を現じたまふ

(一切諸佛土 即時大震動 佛放眉間光 現諸稀有事)
地面が震動するといふことはやはり感動する意味を表はす。佛様は本當に大慈悲の心持を以て教を説かれた。そこで天地の間のものが悉く感動致しました。その時に佛が額の真中より白毫の光を放つて、諸の不思議な事を衆に見せて下さつた。

けなない。といふのは、私が今あなた方の前に立つてどんな顔つきをして、どんな身つきをして、何をやつて居るかといふことは、私が此處へ来るまでの一切の行ひに依つてきまるのであります。だから、私が生れてからこの會館に来るまでの一切の事、それが業です。その一切の事に依つて、私の今やる事が決定されるでせう、それが報です。私が今晩家へ歸つて寝れば、今晩寝るまでの事が私の業です。その業に依つて、明日眼を醒してからの私のやる事がきまる、それが報です。だから業と報とはいつても續いて行く。何も餘所から與へられるものでありません。自分が今までやつた事が善ければ、これから後が善い、自分の今までやつた事が悪ければ、これから後まで悪いのであります。今迄にやつた一切の事が業です。その業に依つて、これから後の自分がどんな心持、どんな行ひ、どんな事をするかといふことが定まるのであります。その定まつた事

が報です。いつでも業に依つて報を生んで、その報が又業になつて報を生む。その報が又業になつて報を生む、その報が又業になつて報を生む、業と報の關係はズット無限に續いて行くのです。

業—報
正報
依報

そこでその報といふのは正報と依報とある。正報といふのは自分の心身、身と心。依報といふのは自分の境遇、今自分はどんな身を持つて、どんな心を持つてどうして居るかといふこと、それが正報であります。即ち過去の行ひに正しく現れて来る報ひです。それから依報といふのは、今自分はどんな境界に居るかといふこと、依は附屬する意味で、附屬するところの報ひ。この兩方がある。今私なら私といふものがどんな身を持つて居るか、どんな心持を有つて居るか。何を考へて居るか。これは今此處に來る

切の自分の身のはたらき、心のはたらき、自分の身を置いて居るところの境遇事情、残らずは、過去の自分のやつたその行ひに依つて決定される。斯う考へなければならぬ。

その所が弛むと、人間の心持といふものはまるで弛んで來る。この頃新聞などを見ると、境遇の罪だナンといふことを矢鱈に書いて居りますが、あれは困つたものです。例へば人殺しをした「ナーニ殺すつもりは無かつたらうけれども、殺すやうな境遇だつたから殺したのだ。當人が悪いのではない。」「詐欺をするつもりは無かつたらうけれども、どうも食ふに困つたから詐欺をした、境遇が悪いから人間が悪くなる……」斯ういふことを言つた日には、人間の行ひに就いて責任といふものは有りはしない善い事だつてその通り「別に人を恵むつもりも無かつたらうけれども、金があつたから恵んだんだらう」と言つた日には、人間のやる事に就て善惡正邪

までの一切の私の行ひに依つて受けたところの正報であります。今私がこの統一會館に來て、こんな壇の上に立つて、これだけの人の前で喋つて居るといふことは、それは私の今の境遇でありますから、今までやつた事の結果としての依報です。如何なる心、如何なる身を持つて如何なる境遇に置かれるかといふこと、これは皆今までやつた事に依つてきます。それが本當の業報です。私は此處に來て、甚だ力は足らぬけれども法華經の話をします。皆様が聽いて下さるといふことは、私の今の境遇であります。この境遇は昨日まで私のやつた行ひに依つて決定されるのです。私が泥棒や人殺しをして牢に入つて居れば、誰もこんなに集まつて私の話を聽いて呉れないでせう。だから私が今までやつた事が若し善ければ、その善い報ひとして今の境界が與へられて居る。若し私のやつた事が悪ければ、悪い報ひとして今の境界が與へられて居るのでありますから、一

の區別といふものはまるで立たなくなる。それはいけないのです。本當に嚴密に言へば、自分の身も、自分の心も、自分の境遇も、これは今までの自分のやつた事に依つて決定されるのであつて、一切の責任は自分一人に確りと負はなければならぬといふことを、本當に考へなければいけない。それでなければ世の中といふものはまるで弛んで、どうにもならなくなつてしまふ。佛教に於てはさういふ風に教へられる。業と報とある、その報には正報もあれば依報もある。今此處はその事を言つて居ります。生死の業報の處、どういふ行ひをすればどんな報ひがあつて、どんな結果があるかといふ、その事を佛様のお力で皆によく見せて下さる。

諸の佛土の 衆寶を以て莊嚴し
瑠璃頗梨の色なるを見ること有り 斯れ佛の光
の照したまふに由る

(有)見諸佛土以衆寶莊嚴 瑠璃頗梨色 斯由佛

それから又諸の佛様の居らつやる所が、いろ／＼な寶を以て飾られて、瑠璃や頗梨の色のやうな所も眼の前に見える。それは佛の光の照したまふに由るものであります。

及び諸の天人

乾闥婆那羅

龍神夜叉衆 各其の佛を供養するを見る

(及見諸天人 龍神夜叉衆 乾闥婆那羅 各供養其佛) 又諸の天上界のものや、人間や、龍とか神とか夜叉とかいふやうなもの、或は乾闥婆とか緊那羅とかいふ、いろ／＼な天上界や人間界に住んで居るところの様々な生物、それが皆各々その佛に供養する。自分の境遇が異つても、佛の教を聴くと、皆その心の累ひを除いて心に喜びを得るのでありますから、あらゆる境界、あらゆる生き方をして居るものが、佛様に歸依して佛の御恩を感謝したといふ、その心持が眼の前に現れて居る。

だから無より有を生ずることはない。どんなに學問しても、どんなに教育を受けても、人間が本來悪かなものであるならば賢くなる筈はない、人間が本來悪い者であるならば、どんなに善い教を受けたつて善くなる筈はないのである。丁度種の無い所には生えないと同じです。それでですから私共は佛の教を受けて、聊かなりとも修行が出来て、聊かなりとも物事がわかるといふことは、佛様も尊いけれども、その佛様の教を受け容れるその種が自分自身の心に本來あるのだといふことを考へなければいかぬ。それが所謂佛性といふものであります。涅槃經の中に

「一切衆生悉く佛性有り」

と仰しやつたのはそれでありませう。どんな人間だつて佛に成る種はあるのだ、若しその種が無ければ、どんなに信心したつて、どんなに教を聴いたつて善くなる筈はない。種はあるのだ、斯ういふ事を言つて居られるのはそれでありませう。

又諸の如來の

身の色金山の如く

淨瑠璃の中

自然に佛道を成じて 端嚴にして甚だ微妙なること 内に眞金の像を現するが如くなるを見る

(又見諸如來 自然成佛道 身色如金山 端嚴甚微妙 淨瑠璃中 内現眞金像)

又諸の佛様が自然に佛道を成じ、この「自然に」といふことは少し面倒な話になりますが、吾々が覺りを開くには修行して覺りを開くのでありますが、その修行といふものが如何に尊いものでありませうとも、無いものを有るやうにすることは出来ない。例へば小さい種を地の中に埋めて置いて、それに水を掛けて、肥料をやつて陽の光をあてれば、この種から芽が出て来て、その芽が莖になり葉になつて美しい花を開くことが出来る。何の種も無い土だけある所に、どんなに水を掛けて、どんなに肥料をやつて、どんなに陽の光を照しても何も出て来ない。

これは人間の生れた時から現れる。オギャアと言つて生れて来たばかりで、何も教を聴かない、何も道を求めない時に、赤ん坊は母親を慕ひ寄つて母親の體に抱きつく本性を有つて居る。母親は學問も智慧も無い者でも、自分の生んだ子供が慕ひ寄れば、それを膝の上に抱き上げる本能を有つて居る。即ち自分を捨て、他のものを親しむ、自分を捨て、他のものに慕ひ寄るといふ本性は、なにも道も教も知らない赤ん坊の時がある。又なにも教育を受けない裏店のおかみさんのやうな人でも、子供が慕ひ寄れば抱き上げるといふ本性を有つて居る。そこで、そこが一切衆生悉く佛性有り、佛性といふことは、つまり自分を捨て、他の者の爲にするといふ佛の種ナンであります。それはモウどんな教育を受けたい者でもあるのです。たゞそれが途中で萎びてしまつて、丁度空気が悪くて埃が多いと、木の芽や草の芽が萎びて枯れてしまふやうに、折角尊い

佛性を有つて居りながら、それが途中でたたらかな
いやうになるから、随分悪人も出て来れば、間違つ
た人間も出て来るのでありますけれども、能く考へ
て見ると生れながら有つて居る。「一切衆生悉く
佛性有り」といふのはそこを言ふのであります。だ
からそれを育てて行くといふ方法を考へることが必
要である。それが社會を健全に指導して行くといふ
上に於ての大問題であります。

それですから「自然に」と申します。その生れな
がらに有つて居る性質をだん／＼と育て、養つて大
きくして行つたその結果、佛道を成すと云つて、佛
と同じに成れるのです。初めから誰も佛に成る者は
ありはしない。初めは凡夫であるけれども、その凡
夫が一步步と進んで行けば佛に成れるのでありま
す。たゞその心の用ひ方に依る。天台大師はその事
を

「凡に始まつて聖に終る」

者が随分あります。だから人間は決して見離してし
まつてはいけません。私共も他の事は存じませぬけれ
ども、學生を教へることはモウ三十來年やつて居り
ますが、どうも善い學生だとか悪い學生だとかいふ
やうなことを軽々しくきめるものではないといふこ
とを痛切に感じます。「あれは見込がある」と言つ
て居つたものが、結局駄目になつてしまふのがあ
る。「彼奴は馬鹿だ、逆も駄目だ」と思つて居つた者
が、中途になつてからグン／＼と伸びて行く者もあ
るのです。一生涯經つて見ないとわからない。やは
り人間はそれ／＼善い性質もあり、悪い性質もある
のだから、その善い性質がどんな機會にどうして芽
を出すかといふことは、これは社會が複雑でありま
すから一概には言へないのです。だからいゝ加減な
事で見切を附けてはいけません。これは子供を持つた
親には殊に大事なことであります。見切を附けては
いけない、「モウ彼奴は駄目だ」と言つてはいけな

言はれて居る。誰だつて一番初めは凡夫ナンです
生れた時からすぐ佛様ナンといふ人はありはしない
皆凡に始まる、凡夫であります。普通の人間であり
ますが、その普通の人間がだん／＼修行して行つて
その修行を怠らなければ、聖に終るといつて、覺つ
た結果佛に成る。要するにそれは一步步々その修行
を續けて行くか行かぬかに依つてきまる。元來覺る
種は自分の心に具つて居るのだ。斯ういふやうに考
へるのであります。

それですから人間が眼が覺めるといふことも、人
に依つて異ふのです。二十になつても馬鹿な者が、
三十になつて眼が覺める者もある。三十でもいけな
いものが四十になつて眼が覺める者がある。四十でも
いけないものが五十になつて眼が覺める者もある。
人間一生涯經つて見ないとわからない。モウ逆も駄
目だと言はれたものが、どうかした拍子にバツと心
が變ると、それからグン／＼と善い方に向くといふ

い。いつ何處でどう伸びるかわからない。小さい時
に伸びる者もあり、中年で伸びる者もあれば、中年
まで駄目で後で伸びる者がある。モウ長い間掛つて
見ないと、當人の性質も複雑であり、社會の状態も
複雑ですから、なか／＼わかりませぬ。

私共の知つた者でもいろ／＼のがあります。こ
の間斯ういふ例がありました。三人の男の子供を持
つて居つた人がある。長男はマア長男だけにおとな
しくて平凡だけれども行ひが正しい。次男は少し頭
腦が良い、これは大分物になりさうだ。三男はどう
も馬鹿だ、此奴は見込が無い。それから親類の家で
子供が無い、それでも宜いから一人養子に呉れない
かと言つた時に「どれでも宜いと言ふなら一番見込
の無い三男をやらう」といふので三男をやつて、上
の子供二人を育てた。所が長男は途中で病氣をして
死んでしまつた。次男は頭腦が良いから大分良いと
思つた所が、これはあまり頭腦が良過ぎて、チヨット

縮尻つて、賄賂を取つたかなにかして、世間から排斥されてしまつて物にならない。親父はほんやりして居る。結局馬鹿だと思つて養子にやつた三男がメキ／＼發達して来て、その三男の仕送りで親父は食つて居る。この間も熱々遺憾して「どうもわかりませぬナ、結局三男の奴が一番馬鹿で見込が無いと思つて呉れてやつたら、彼奴のお蔭で今は私は暮して居ります。見込の有る長男は死にました。見込の有る次男は罪を犯して今どうも役に立ちません。駄目だと思つた三男のお蔭で斯うやつて居ります」と言つて、熱々遺憾して居りました。

そんなやうに人生が複雑であつて、人の心が複雑でありますから、長い間掛つて見ませぬと輕々しく人間の價値をさめる譯に行かない。そこで絶えず努めなければならぬ。人の事は指いて問はず、自分に就いて言つても絶えず努めなければならぬ。自分の子供にも絶えず努めさせなければならぬ。決して厭

世尊大衆に在して 深法の義を敷演したまふ

(世尊在大衆敷演深法義)

その世尊即ち佛に成つた方が、大勢の人間の中に出て深き法の意義を説明される。この「深い」といふ言葉がチョット注意しなければならぬ。物は表面を見たら皆つまらぬものです。深く見なければ物の價値はわからない。私は一度斯ういふ経験があります。日光の中禪寺に行つて居りました時に、友達があれから少し先の方の湯の湖の近邊に居つて、使を寄して、「今晚一緒に晩飯を食つて緩くり話さう」と言つて來ました。友達がそんな所に居るとは知らなかつたので、使を受けて私は非常に喜びまして、早く會ひたいと思つて、自動車を呼んで貰つて出来るだ

いてはいけない。決して途中で見切を附けてはいかないといふことが、世の中をかなり長く見るとわかるのであります。けれども要するに自然です。本來有つて居る性質が何かの機會に於て、何かの方法に依つて發展した時に於て、その人の佛性といふものが立派になつて行くので、決して無より有を生ずるものではない。皆人々が努力して息まなければ、佛の境界にも到達の出来るものだといふことを忘れてはいかない。自分を輕んじてもならない。他の者を輕んじてはならぬ。「自然に」といふことはさういふ意味に取りります。人間の本來有つて生れて居る性質、その性質がだん／＼發達して行きますと、佛道を成じて佛の境界に達することも出来る。

さうなると身が黄金の集まつた山のやうに周圍の人の仰ぎ見るやうなものになる。美しくして、誰が見ても「あゝどうも恐入つたナ」と思はれるやうな氣高い相になる。清き瑠璃で出来た盤の中にいろいろけ急いで湯の湖まで行つて、その友達に會つて、緩くり話をして一緒に泊つた。翌日の朝その友達に別れて、私は緩くり／＼歩いて又中禪寺に歸つた。さうすると行き掛けには何も眼に入らない、たゞ友達に會ひたいと思ふから、自動車に乗つて出来るだけ飛ばして行つてしまつた。歸りには、今日一日に歸れば宜いと思ふから氣が落着いて居ります。緩くりあの戰場ヶ原、男體山の下を歩いて見ますと、實に美しい花が咲いて居る。何でもない草の中に、桔梗も咲いて居る。龍膽も咲いて居る、女郎花も咲いて居る。美しくて堪まらない。「どうして昨日此處を平氣で通つたかな」と熱々考へた。つまり急いではいけない、急いでスツと通つてしまふと、桔梗も、女郎花も何も見えはしない。所が緩くり歩いて見ると、一つ／＼の花が皆美しい。一つ／＼の草が皆綺麗な花を持つて居る。世の中の事はこれナンです。サツと表面を見たんでは何も美しい物は見えない。

深くジツと見ると、何でもない物の中に深い意味が現れて来る。美しい物が認められる。

そこで深くといふことが非常に大事なのであります。物は深く見なければいけない。いゝ加減に見て居つたのでは、人生は海に無意味、殺風景です。けれども能く考へて見ると、何でもない事がそれのの意味を有つて来る。何でもない人のやる事が、ジツと見て居ると、やはり相當な尊い性質を表はして居る。それを見得ない人は不幸な人であります。一生涯たゞ忙しいと思つて暮して居る。少し暇になつた時には腰が屈んで白髪が生えて、その中に死んでしまふ。何しに生きて居るかわからないことになる。

そこで深き法の意味を説くといつて、物事を本當に深く見、人生なり世の中なりの事柄をジツと見てその中の深き尊き意味を見出すが宜いといふことを佛がお説きになる。

いやうに大事に守つて居ることは、丁度美しい珠を大事にして居るやうな様子で、少しも映目の無いやうに、少しも間違ひの無いやうにと修行して居る者がある。

戒を持つといふことには二つの意味があつて、小乗の意味と大乘の意味がある。小乗の意味で言へば、吾々は凡夫で間違の多いものだから、間違をする世間にも迷惑を掛けるだらう。だから出来るだけ悪い事をしないやうにしたい。斯ういふ心持で佛の戒を持つて行く、これが小乗的といふ極く低い方の持戒であります。それも守らぬより宜しいウツカリして酔ばらつて道を歩いて居る人に怪我をさしてはいかぬ。ウツカリして腹を立てる人の頭を毆つて怪我をさしてはいけないといふやうな風に、自分の間違をすまいといふ考から、佛の戒を守つて行くといふ、これが所謂小乗の低い方の守り方です。これでも悪くはありません。

一一の諸の佛土

佛の光の所照に因りて

聖聞衆無数なり
悉く彼の大家を見る

衆

(一) 諸佛土 聖聞衆無数 因佛光所照 悉見彼大家

その佛様の教をお説きになる所には、聖聞といつて世の中の無常を見て世の中に執はれないやうな人も澤山居る。それが佛の光の照す所に因つて、大勢の人間の相が見える。

或は諸の比丘の
精進し淨戒を持つこと

山林の中に有りて
猶ほ明珠を護るが如
くなる有り

(或有諸比丘 在於山林中 精進持淨戒 猶如護明珠)

これからは菩薩の行の大體を説いてあります。そこで又能く見て居ると、佛様の教を本當に實行して居る者も世の中には随分ある。或は諸の比丘が山林の中に在つて淨戒を持つ、淨戒といふのは佛様のお與へになつた戒です。それを少しも違はな

併ながら大乘の方から言ふと、自分は出来るならば世の中の人を教へ導いて、世の中の人を爲に力を盡したい。その世の中の人を爲に力を盡す者になるには、今の行ひを慎んで、自分が先づ完全なものにならなければいけません。斯ういふ大きな理想を立て、その理想を實現する爲に、戒を守つて行く、これが大乘戒の方です。さうありたいものです。將來世を教へ、人を導く人になれると思つたら、今日の一日を戒めなければならぬ譯です。私は今此處で法華經を説いて、マア菩薩の行ナンと言つて居りますが、菩薩の行を説く人が音羽の三丁目邊りでカフエーへ入つて、酒を飲んで酔ばらつて、硝子戸を打壊して罰金などを取られたんでは、どうも菩薩の行は説けません。だから自分が佛の教を弘める人だと思つたら、その教を弘めるに相當な善き行ひをしなければならぬ。斯ういふ意味で佛の戒は守れる譯であります。それが大乘戒であります。今の自分は

凡夫であるけれども、將來は佛の化導を助ける人になりたいたい。さうなる爲には現在の行ひを慎んで行かなければならない。それはチヨウド「明珠を護る如し」で、そこらで買つて来た硝子のコップのやうなものなら「ナニニ壊れたつて大したものではない」と思ふから粗末に扱ふけれども、これが水晶の珠かナニかで、大切なものだと思つたら、チヨウト瑕が附いても大變だから、叮嚀に扱ふでせう。自分が將來佛と同じものになつて、世を導き人を教へるものになり得ると思つたならば、これは水晶の珠のやうなものだから、チヨウトした傷も附けたくない、チヨウトした穢れも帯びさせたくないと思つて、一言一行を慎んで自分を大事にする心持が起る譯であります。それが所謂明珠を護るが如しといふことです。どうも私共はウツカリして居る間に、自分のやつて居る事が周圍に大きな影響を及ぼすといふことを時々教へられる。下谷の方の或る道で小さい子供が

にはさういふ風に眞直ぐに覺えられる「オイ」と言ふことが善いか悪いかは別問題でありますけれども面白い話です。

さういふやうなもので、自分が思はず言つた事がいつの間にか他に或る感化を及ぼし、或る影響を及ぼして居る、それだから、吾々は自分の一言一行といふものを自分のことと思つてはならない。自分は勝手にやるつもりだけれども、周圍にいつの間にか或る影響を及ぼし、或る感化を及ぼして居る。人間は一緒に生きて居るのでありますから、自分の言ふ事、爲す事、皆周圍に或る感化を及ぼし、或る影響を及ぼす力になる。場合に依れば周圍を傷つける力になり、場合に依れば周圍を救ふ力になる。何かの力を有つて居るのだといふことを忘れてはならぬ譯であります。そこが所謂菩薩の行であります。それであるから自分の身を慎しみ、戒を守ること美しい珠を瑕を附けないが如くにするといふことも、こ

二人で話をして居る。「オイお前のお父さんの名は何と言ふのだい」「僕のお父さんは何々と言ふんだ君のお父さんの名は……」「僕のお父さんは何々と言ふのだい」「僕のお母さんの名は……」「君のお母さんは何と言ふのだい」「僕のお母さんの名は……」「おかしいな、家のお母さんの名もオイと言ふのだよ」と言つて話をして居つた。それは御主人が細君を呼ぶのに「オイ」と言つて呼ぶ。だから子供は聽いて居つて、お母さんの名は「オイ」と言ふのだと思つて居る。モウ一人の方の家の御亭主も「オイ」と呼ぶから、お母さんの名は「オイ」と言ふのだと思つて居る。兩方の子供が、家のお母さんの名は「オイ」と言ふのだと思つて話をして居つたといふ。「オイ」と言ふのだと思つて話をして居つたといふ。親父の方は氣が附かないで、取敢ず「オイ」と言ふのだけれども、子供はお父さんが「オイ」と言ふから、お母さんの名は「オイ」と言ふのだらうと思つてしまふ。そんなものです。親の一言一行が、子供

れは佛道修行の一つである。さういふ相が眼の前に見えるといふのです。

又諸の菩薩の 施忍辱等を行ずること

其の数恒沙の如くなるを見る 斯れ佛の光の照したまふに由る

(又見諸菩薩 行施忍辱等 其数如恒沙 斯由佛光照)

「施」は布施、人に施しをすること。「忍辱」は人が不正な事をしても瞋恚を發しないこと。諸の菩薩がその布施忍辱を行じて居る数は、恒河の沙の数の如くであつた。これも佛の智慧の光が照すことに依つて、さういふ事が見えるといふのであります。

又諸の菩薩の 深く諸の禪定に入りて 身心寂にして動せず 以て無上道を求むるを見る

(又見諸菩薩 深入諸禪定 身心寂不動 以求無上道)

諸の禪定といふのは、心をしづめるのは結局は一

つでありませぬけれども、その方法はいろいろであり
ますから、諸の禪定と言います。坐禪ナンといふ
ことが今我國では一般に行はれて居りますが、必ず
しも坐らなくても宜い、坐るのは一つの方法です。悪
いとは申しませぬ。静に廣い所に坐つて考へるとい
ふことも宜いでせう。けれども根本は心の持ち方で
ありまして、心の持ち方が狂つて居れば、大きな部
屋の内に坐つても何もなりはしない。却つていろい
ろな事を考へ出します。古い川柳に『坐禪して久し
い借を思ひ出し』といふのがあります。坐禪を組ん
で居たら『ア、いつか彼奴に五十錢借りてまだ返さ
なかつた』といふ、舊い借を想ひ出すといふ。静かに
なるという／＼な事を想ひ出すものです。だから心
の根本が間違つて居れば、静かになればなるほど却
つて迷ひが多くなるかも知れぬ。要するに禪定とい
ふのは心の持ち方を言ふのであつて、心の持ち方が
確りして居れば、坐つて居つても宜し、立つて居つ

も考へないで毎日を送つて居る。さうして忙しい忙
しいと稱して居る。なんだか譯がわからぬ。吾々の
友達にもさういふのがあつて、吾々と會ふと『小林、
君は佛敎をやつて居るさうだ、俺も佛敎の事を聞き
に行きたいと思ふけれども、どうも忙しくて……』
そこで私は言ふ『君は本當に忙しいのかい、忙しく
ないのだらう』『イヤ、忙しい、逆も暇が無い』暇
が無いと言つても、君は髻を綺麗に剃つて居るぢや
ないか、朝起きて髻を剃る暇があるぢやないか。頭
髪にコスメチックを付けてピカ／＼光らして居るぢ
やないか。頭髪を分ける暇はあるぢやないか、洋服
もチャント着て居るぢやないか、着物を着る暇はあ
るぢやないか。飯も三度食ふぢやないか、飯を食ふ
暇はあるぢやないか、何が忙しいのだ、顔を綺麗に
することが出来て、頭髪を光らせることが出来て、
服装を整へることが出来て、心を清らかにする、行
ひを正しくするといふ暇が無い。そんな馬鹿なこと

でも宜し、歩いて居つても宜し、どんな場合でも所
謂禪定、心をしづめるといふことが出来るのです。
だから諸の禪定と言ふ。いろ／＼なやり方がある、
坐つて居つても宜し、立つて居つても宜し、働いて
居つても宜い。心の持ち方であつて、さうして心を
しづめることが出来るのであります。その心をしづ
めて身心寂にして動せず、身も心も動かない。さう
して行く間に無上道を求むると言つて、佛に成る道
がわかつたといふのです。

静かに考へるといふことの無い人間ほど憐れなも
のではない。どんなに忙しい人でも、静かに考へる暇
が十分か、十五分無いことはないでせう多くの人は
『忙しい』と言つて、どうしてもそれをやらな
い。朝起きて顔を洗つて、朝飯を食つて出て行つて
夜遅くになつて歸つて来てその儘寝てしまつて『忙
しい』と言つて居る。一體人間は何しに生きて
居るのか、人生の意味が何だか、そんなことは少し
はないぢやないか、何が忙しいのだ。君が言ふ忙し
いといふ間のせめて十分でも十五分でも割いて、人
生の意味を静かに考へたならば、その方が本當に役
に立つぢやないか。本當に忙しいのかどうか、自分
で振返つて見なければなるまい』といふことを能く
議論するのであります。實際は私共は忙しいと言
つては濟まない譯です。夜十時に寝るのを十時十五
分に寝ても決して睡眠不足になりはしない。熟睡す
れば時間が少なくて済む。せめて寝る前の十分か十五
分でも静かに考へて見なければなるまい。幾ら忙し
いと言つてもそれだけの暇が無い筈はない。だから
忙しいといふのは要するに口實であります。心に弛
みがあるからそんな事を言つてごまかして居るので
あつて、本當に忙しいといふことはない筈です。ど
んなに忙しくたつても、その仕事と仕事の間に僅か
の暇の餘めないといふことはない。
英吉利のセシル・ローズといふ人は、御存知のや

うに南阿弗利加へ行つて、金の鑛山やダイヤモンドの山を發見して、南阿に於ける英國の根據地を造り後に彼處に國が出来た時に、自ら總理大臣となつて非常なはたらきをして、英國人として大變な功を立てた人でありますが、あの人が始終耶蘇教の聖書をポケットに入れて居つた。實業家であつて、同時に政治家でもありますから、非常に忙しい人でありますが、その間に柱にもたれて二分か三分聖書を読んで居る。又なにか用があるときそれをポケットに入れて仕事をやつて居つたといふことであります。そのセシルロープが晩年に至つて遺憾をして「俺がああ聖書をポケットに入れてなかつたらば、疾に縮尻つて居つたらう、毎日々々二分、三分づつ聖書を読んでお蔭で、兎にも角にも責任を完うして今日まで来た」といふことを述懐したさうであります。さういふ忙しい人でも、仕事と仕事の間に三分や五分は読める。その三分か五分の間ポケットから聖書を出

ぬ。成程吾々の眼の前の世の中は始終變つて居ります。併ながらその變つて居る中を一貫して變らないところの道が存在するといふことを考へなければならぬ。それが寂滅の相であります。變るといへば皆變つて居る。私が此處に二階の控室から降りて来て一時間餘りお話を居るのでありますが、此處へ降りて来た時の私と、話をやめて二階へ昇つて行く時の私とは異つて居ります。この頭の髪が幾らか伸びて居る、眼には見えないでせうが伸びて居ります。若しこの間に伸びないでせうが一生掛つたつて伸びない譯ですから、少しは伸びて居る。この爪も幾らか伸びて居る、この頭髮の黒いのが幾らか白くなつて居る。顔に幾らか皺が寄つて居るといふ風に、前に降りて来た時の私ではない。此處を出て行く時には異つた私になつて居る、極めて僅かな變化でありませうが變つて居ります。斯の如くして毎日々々變つて居る。併ながら毎日々々變つて居つても私は私

して耶蘇の説いた教を學ぶといふことが、それが一生の事に大きな力になつた。その位は誰でも出来ない筈はない。一日に三分か五分が儉めないといふ筈はない。それを忙しいといふことを口實にして道も教も學ばないといふことは、極めて愚かな事です。ですから禪定といふのは心をしづめることであつて、心を靜かに考へて見ますと、無上道と言つて、佛に成る道が得られる。これを求めないで終るといふことほど愚かなことはない。さういふやうな相も眼の前に見える。

又諸の菩薩の 法の寂滅の相を知りて 各其の國土に於て 法を説きて佛道を求むる を見る

(又見諸菩薩 知法寂滅相 各於其國土 説法求佛道)

寂滅といふのは不變化の意味であります。變化しないといふことは物が變らぬといふことではありませ

です。頭の髪が白くなつたら小林でなくなる譯ではない、さうすると變つて居るが、その變つて居る中を守つて居る變らない何物かあるでせう。これを私の本心と言ふか、本性と言ふか、佛性と言ふかさういふものがある。若しさういふものがなければ變つたら異つた人になつてしまふ。だから人生常に變るといふことも一面の觀方でありませうけれども、その變る中を一貫してなにか變らないものがズツト存在するといふことも一つの觀方であります。その變らないものを捉へることが出来なければ、人生は何だか譯がわからない。それが寂滅の相です。種々なる變化を一貫して永久に變らないものがある。これが道であり、これが教である、これが人間の本性である。これが天地の總ての本當の性質である。このものを捉へる、それが法の寂滅の相を知るといふことであります。さうして銘々が自分の居る所に於て、教を説いて

佛道を求める「法を説いて佛道を求む」といふことは、極めて平凡な言葉であるが、善い言葉であります。自分一人の事をやつたんでは佛に成れませぬ、自分がわかつたら幾らかでも他の人にわからせるやうに努力する、自分が覺つたら幾らかでも他の人を覺らせるやうに努力するといふ。そこで自分が佛に成るのであります。一人で考へて居るだけでは佛に成りはない。自利といふこと、利他といふことは必ず伴はなければいけません。別な言葉で言へば自覺といふこと、覺他といふこと、これはいつでも伴つて行かなければならぬ。一人でわかつて居るといふのは本當にわかつたのではない。自分が幾らかでもわかつたら、それを人に話して見る。人に傳へて見る。人に傳へて見ると、まだ自分のわかつたのは本當ではないといふことが初めてわかる。私共でも、法華經を家で読んで居る時には少しも困難はない。すら〜と讀める。けれども斯ういふ所へ來て話し

今までも幾度も申した事であり、更めて申すに及びませぬけれども、人間は志を立てるといふことが必要である。自分は一體一生をどうして終るのだらうかといふことを考へることが必要であつて、たゞ生きて居るだけが無目的であるならば、人生百まで續くものでないから洵に情けないものである。又周囲の人に認められるといふことだけが目的であるならば、自分が骨折つても人が認めない時にはガツカリしてしまふでせう。どうしても出来るだけの事に於て世の爲、人の爲に幾らかでも役に立ちたいといふ心持があつて、初めて吾々の一生が意味を有つやうになる。だからそれが大きい志です。大乘の修行をするのを摩訶薩と申すのはそれである。菩薩は必ず摩訶薩である。「摩訶」といふのは大きいといふこと、「薩」といふのは薩埵といふ字を略したのであつて、これは人のこと、だから摩訶薩といふのは大きな人といふことです。大きな人とい

て見るとなか〜難しい、此處はどう言つたら宜からう、此處はどう説明したら皆の心に入るだらうか、まだこれは工夫が足らなかつたナ、まだ心の鍊り方が足らなかつたナといふことを感じます。人に言つて見て初めて自分の足らないことがわかる。人を導くやうに努力して見てまだ自分の足らないことがわかる。だから自分が覺ることに依つて人を覺らせる。人を覺らせようと骨折ることに依つて自分の修養、自分の努力が一層加つて行く、この両方が相俟つて行かなければならぬ。「人はどうでも俺さへ善ければ……」といふ考へでは、到底本當の覺りといふものは開けるものでない。だから「法を説いて佛道を求む」、教を人に弘めるといふことをやつて居る間にだん〜自分の智慧も進んで行けば、自分の行ひも完全になつて行つて結局佛の境界に到達することが出来るのであります。此處の所は佛道の修行をする人のいろ〜な道筋を説いて居ります。

ふのは何だ、自分の存在に依つて自分だけが利益したくない、自分の存在に依つて少しでも周囲の人を善くしたいといふ、多にか少いかそれはわからぬけれども、多少なりとも周囲の人を善くしたいといふ志を常に失はない人、それが大きな人である。別の言葉で言へば大心の人である。大心といふのは小さな己に執はれない心持、それは場合に依れば大勢の人を感化することも出来る。場合に依ればその感化の力が及ぶ所は少いだらう。けれども兎に角自分だけに執はれたのではつまらないやないか、五尺の身、五十年の命を勘定して見たつてつまないやないか。何とかして自分が生きて居る間に、一人でも二人でも、三人でも、同じ心持の人を造つて、自分の學び得た所を朽ちないで滅びないで後まで遺さう、斯ういふ心持、それが所謂大心の人です。印度の言葉では摩訶薩と言ふ、この大心の人といふことを略して「大士」と言ひます。日蓮大士とか、觀世音

大士とかよく書いてありますが、その心持がなければならぬ、これは決して夢でもなければ空想でもない、その心持がありさへすれば出来る事でありませぬ。

それが所謂佛になる縁であります。であるから「説法をして佛道を求める、教を世に弘めるといふ大勢の人の心を覺さしてやりたいといふ行ひその心の有る者は、やがて佛の境界に到達することが出来る」と言はれて居るのであります。

さういふ心持があると、大勢の人を教へ導きたいといふ心持は、今度は大勢の人の過ちを宥すといふ心持になります。そこが大事です。人の過ちを教へて「彼奴はつまらない奴だ」と言つて攻撃すれば、その人とは縁が切れてしまふでせう。だから出来るだけ世の中の役に立ちたい、出来るだけ大勢の人の爲になりたといふ心持がおこりますと、出来るだけ人を隔てたくないといふ心持になるから、人の發

立つて、少しなりとも周囲の人を幸福にしてやりたいといふ気分になつた時は、人の中に入つても気がひろ／＼として居る、快い心持です。それが家に入つて畏れずといふことで、この境界に行きたいものです。誰の中に入つても何ともない。斯ういふ人は偉い人です。なか／＼私共の分際として、そこまで行けるか行けないかわかりませぬけれども、理想としてはさうありたいと思ひます。又勝れた人は初めからさういふ気分を有つて居るやうであります。松平樂翁公といふ人は、御存知のやうに徳川の半頃に生まれて、幕府の財政を改革し、當時の江戸の制度などを改革して、今日でもその恩恵を受けて居る立派な人でありませぬ。この人は洵に立派な人物であつて、子供の時から気が潤かつた、小さい頃に麻布の永坂の近邊に下屋敷があつて、そこで育つて居つた。その時に永坂の近所の鳥居坂といふ所に戸川内膳といふ旗本があつて、その家から火が出て、その火事

點を探して人を攻撃したいといふやうな、險惡な、イラ／＼した気分が無くなる、これが人間を非常に善くするのであります。ウツカリするとイラ／＼して来るさうして周囲をみな敵にして、一人で信心して居るといふことになる。しかしながら、世の爲、人の爲に生きて居る自分だと思つたら、周囲の人を敵にして喧嘩をするのはつまらぬじやないか、といふ優しい気分になる。心が大きくなれば優しくなり、心が小さくなるとイラ／＼してヒステリックになる。だから人の爲が結局自分の爲になる、イラ／＼しない寛くした気分が世の中を送れますから、それは自分の爲です。

その事をお経の中には「入衆不畏」(衆に入つて畏れず)と言つてあります、大勢の中に入つて平気で居られるといふ。周囲の人間を敵にしたり、周囲の人を恨んだり嫉んだりするやうでは、じつとして居られないから身が慄えてしまふ。所が自分が世の中にこの火事は人の命をとりぬ坂

これより上のとがは内膳
といふ落首を書いて、戸川の屋敷の前に貼りつけた者がある。皮肉な落首で大評判になつた。それは松平樂翁公十三の年でありませぬが、近習の者がその話をして「こんな落首が出ました、なか／＼世の中にも面白い事を書く者がありますナ」と言つて申上げた。すると樂翁公はなか／＼子供の時から文學的の嗜みもあつたと見えて、ジツとそれを見て居つたが「これはどうもいけない所がある、自分ならモウ少し良い詠み方をするがナ」と言つた。そこで近習の者が「若様はどうなさいますか」「イヤナニ……」といつて遠慮して言はない「折角サウ仰しやつたの

ですから、どうぞお聴かせ下さい」とだん／＼皆に
せがまれて、漸くのこと「自分なら斯う詠む」と
言つて示されたのが斯ういふのです。

この火事は人の命をとりむ坂
けがの事なりとがは内膳

「これより上のとがはない」と叱言を言つてはいけ
ない、誰もわざと火事を出さうと思ひはしない、け
がのことだからとがはないのちと言つた。これを見
て近習の者は、感服して「これは偉い事だ、若様は
人の上に立つ器量のある方だ」と言つたが、果して
後に非常な名君になつたといふことであります。

さういふ風に「これより上のとがはない」と言つ
て重く見るよりも「けがの事だからとがはない」と
言つて宥すといふ、この心持が人の上に立つ人には
殊に大事なことです。それはつまり自分が世の中を
教へ、人を導かうといふ気分の人であつて、はじめ
て出来ることではありません。世の中が今日のやうに險

悪になりますと、口では私共もこんな事を言つて居
つても自分自身が絶えず癩癩をおこしたり、イライ
ラするのであります。何とかして氣を潤く持つて
世の中のつまらない人の過ちを宥し、人の罪を恕す
といふ風にして行つたならば、ゆつくりした氣分を
以て世の中を渡つて行くことが出来るだらうと思ひ
ます。

それでこの所の經文は、佛道修行の大體を説かれ
て居るのであります。さうして、その日月燈明佛
といふ過去の佛が、だん／＼教を説かれた結果、最
後に自分の心に覺り得たことを打明けて説かれた。
今の釋迦牟尼佛も必ずさういふやうな尊い教をお説
きになるだらう、といふことになつて行くわけであ
ります。

この所はたいへん詳々しく申したやうであります
が、法華經の教を説くに就ては、菩薩の行といふも
のゝ大約の様子をよく解るやうに申上げて置く方が
よからうと思つて、いろ／＼申述べたのであります
(第十五講了)

記事

日比野老尼 昨春歸邦されて居た日比野尼は
遂に七十餘歳の高齡にも不拘益々元氣旺盛で
今度布哇より更に北米大陸への布教傳道を
目して故國を設立された。この壯舉の前途を
祝願せんが爲め、昨秋有志の僧侶が相會して
送別の清宴を張つた。席上には今成權大僧正
を始め、熊井敬學部長、小西、星野、和賀、
梶木、山口等の諸師、在家側には柴田及岩上
理事、本多都喜子女史、石毛、安江、和田、
河合、中村、和賀、磯部等の諸氏を見た。而
して饗別として法衣上下を贈つたことに就て
大に感謝され左記の挨拶狀を本部に寄せられ
て、一々に御禮狀を差上ぐる筈であるけれど其
乍略儀各位へ宜敷取敢して頂きたいと申添へ
てあつた。

謹啓 尊台各位益々御安祥恭賀至極に奉存
候 昨て私事昨春歸邦爾來永々滞在申は終
始容易ならざる皆様の御高配を辱ふし只々
難有感激に不耐申候 殊に出立に際しては
送別の盛宴を開かせられ加之何より結構な

る御禮別を賜り重々恐惶之至に御座候
御座候にて本日無事着陸仕候間乍憚御政念
被下度 尙向後共宜敷御願申上度候
先は不取致着布之御挨拶旁右御禮申上度如
斯に御座候 敬具
日比野日眞拜

(宛名連名)
尙作末筆御自愛專一に奉祈候
又一々御挨拶の書狀可差上管に御座候へ共
取急ぎ御連名に御無禮仕候段平に御宥し
被下度候

教報

本部團報

開館第三周年 春光融々、玉化蕩々、悠遠に
して光輝ある我紀元の佳節に當り、本會館は
爰に開館の第三周年を迎ふるに際し、其十五
日の 釋尊御涅槃會堂に翌十六日の宗祖大聖
人御生誕會法要を併せて營んだのである。
本部教務の諸師のみならず、本妙法華宗の釋
眞誓師も御参列下さつて、莊嚴なる法筵が張
られ、松本、小林兩教授並に岩野少將等も列

座されたことは前に有難い事であつた。たゞ
座席が狹隘な爲めに室外に佇立された方々に
申譯もない恐雜の次第で、謹んでお詫を申上
げる。

午後二時二十分より講演會に移つた。中村
清一氏の開會の辭に次で、小林一郎先生は
『穠土と淨土』と題して一時閑餘り簡明に其
深義を敷衍された。松本彦郎次先生は『日蓮
聖人歴史觀』に就て十餘年御研鑽の弘博なる
蘊蓄を披露された。これは近日『教』誌上に發
表することになつてゐる。山口智光師の開會
の挨拶中に當日施本せる『日蓮聖人』の内容
を紹介され、豫定の通り五時に大盛會の幕を
閉じた。此日は新顔の人々も多く結縁された
ことは何よりも大きな喜びであつた。

維持員懇親會 開館紀念日の夕景より本團の
名譽、維持、贊助團員有志の親睦會を神田の
一茶亭に開いて、上田理事長、井上男を中心
にして、非常時に對する時代對應の教化運動
の懇談に華吹かせた。
一二の方より時々こんな會合をするやうに
との御注文もあつて、私共の企てが有意義で
あつたことは嬉しく思ふと同時に、益々精進
せねばならぬ。

二本松教信

一月十五日 社會事業二本松傳教不樂會托鉢修行
 同 十六日 於蓮華寺題目講修行
 同 十九日 郡山市に於て縣下聯合社會事業協議會に出席す
 同 廿日 午後一時五十七分二本松縣通過にて戰死者遺骨五基海里に向ふ因つて見送願す
 同 廿三日 福島市に於て縣主催の少年教談
 同 廿四日 委員講習會に出席す
 同 廿五日 舊年末に就き貧困者に施米す
 同 卅一日

ホノル、教報

お題目を唱へて法華信者街頭進出
 沿道の人々を驚かした團扇太鼓の音
 『南無妙法蓮華經』と大書せる二歳の太鼓を押し立て小林日種師を主任とするヌアヌ街上手の法華經寺では今後毎週一回救世軍式に街頭進出を行ふ事となり昨夜三十余名の信者は團扇太鼓の音も勇ましくお題目を唱へながらヌアヌ街、バレンタニア街角を起點としてバレンタニア街をマラマ劇場前まで行進し初めてのことと沿道の人々を驚かした。(一〇、一、一九本誌報知)

時まで、寒修行會として法華經開結三十章を一日一章宛讀誦唱題し、其大意を拜講してお互の信念増進に資した。

横濱教誌

○第九回寒行 當地の寒行は、當年も亦僅されて、回を重ねること茲に實に九年度に及んだのである。磯部先生は、東京に於ける法務御多忙の中を、連夜御來濱下されて、法華經各品の玄旨を平易的確に開陳なされた。會員、又よく各々の家庭を開放して法華は毎夜連續し有意義な寒行日が味はれたのである。會員は各自に俗務を持つてゐるが、その中を皆日の間一夜も欠かされなかつた京田、高田、和田の三氏を擧げ得たのは、法のため誠におりがたい事である。

一月六日の寒行第一夜に、日頃會合への出席率百パーセントの若上氏が病魔の侵す處となり、寒行へは終に全体されたのは遺憾の上も無い。併し、之れが極く輕症であつたのは、何よりである。

寒行も終に終了せんとする二月三日、石毛氏御息の御成婚祝宴が張られた。新生活に輝かしいスタートを切られた若き御夫妻のため、前途の御多幸を祈つて止まないであらう。

法華經講座 一經の肝心、如來善量品が縱横に解釋されつゝある、嚴密もあけて一同は彌彌眞劍味が加はつてゐるやうに見受けられて有難い。この成佛への直道を一人も多くお聴聞して頂きたい。そして身にお讀み遊ばすやうに念願してやまぬ。

日曜日集會 毎日曜日午後二時より

一月二十七日

所 感 村田道雄師 山口智光師

法華經讚唱

二月三日 雪中の感激 和賀義見師

折柄猛烈の吹雪で、特に感銘深きを覺ゆる。

同 十七日 本月より一月一回を特に讀誦會として、信仰の増進をはかることにした。而してこの信仰には會員は成るべく多く参加し、盛装の午後二時より四時まで讀誦を續けるのである。従つて團員の年忌同向等には最もふさはしいから、申込まれる方もある。此日の當番導師は榎木顯正師であつた。次回は三月三日の豫定。

寒行會 本部に於ては、昨冬と同じく一月六日より二月四日まで、毎朝六時四十分より八

寄附金維持及團費誌料領收

(自一月廿一日 至二月二十日)

一金貳圓貳拾錢也	千葉縣 黒須 無外殿	一金貳圓貳拾錢也	千葉縣 中山 重康殿
一金貳圓貳拾錢也	岩手縣 小岩 昌夫殿	一金貳圓貳拾錢也	東京 近藤 静子殿
一金六拾錢也	大阪府山の神傳道園殿	一金貳圓貳拾錢也	千葉縣 並木 博殿
一金壹百圓也	千葉縣 小澤 元重殿	一金貳圓貳拾錢也	東京 柴田 武治殿
一金拾圓也	東京 和賀 謙介殿	一金貳圓貳拾錢也	同 田中 米吉殿
一金貳圓五拾錢也	同 矢代多一郎殿	一金貳圓貳拾錢也	録倉 野元 盛幹殿
一金貳圓五拾錢也	奈良縣 出口馬太郎殿	一金貳圓五拾錢也	東京 直井良一郎殿
一金貳圓五拾錢也	兵庫縣 榎倉鹿太郎殿	一金貳圓貳拾錢也	福島 原田 清造殿
一金五圓也	千葉縣 田中 道爾殿	一金貳圓貳拾錢也	名古屋 相澤 さき殿
一金貳圓五拾錢也	甲府 高野 毅殿	一金貳圓貳拾錢也	神戸 林 重太郎殿
一金貳圓五拾錢也	高岡 高山友次郎殿	一金貳圓貳拾錢也	福井縣 平池 岩吉殿
一金拾圓也	千葉縣 市川立正會殿	一金貳圓貳拾錢也	東京 山田 英二殿
一金貳圓貳拾錢也	同 富田 こさ殿	一金貳圓貳拾錢也	同 沼部彌太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	同 種田藤三郎殿	一金貳圓貳拾錢也	同 永島 三郎殿
一金貳圓貳拾錢也	東京 加藤正治郎殿	一金壹圓也	同 青山 信市殿
一金貳圓貳拾錢也	大阪 濱田鶴太郎殿	一金貳圓貳拾錢也	群馬縣 谷本 繁殿
一金貳圓貳拾錢也	東京 伊藤 夏千殿	一金貳圓貳拾錢也	同 磯島 品造殿
一金六圓六拾錢也	同 鈴木宇多子殿	一金貳圓五拾錢也	東京府 森川拾次郎殿
一金參圓也	横濱 高橋 博殿	一金貳圓五拾錢也	千葉縣 風戸 三蔵殿
一金貳圓五拾錢也	同 宮本 正三殿	一金貳圓五拾錢也	東京 飯原佐次郎殿
		一金貳圓五拾錢也	東京 高橋 義雄殿
		一金貳圓拾圓也	同 井上道太郎殿

念告

從來本部に於ては正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以て御清撥相仰ぎ居申候處彌々時代の趨勢に鑑み爰に本團は先づ本誌の増大を圖るに共に正團員と誌友とを區別すべき必要相逼り申候に付本誌巻頭略則御諒承の上爲法團爲一切衆生可相成團員として何卒御費助あらんことを偏に奉願候

財團統一團

清水龍山

守屋貫教
鈴木一成

中谷良英
榎原久遠

共編

内容見本呈上

新修 略註 白蓮聖人遺文集

再版
改訂

科段 別註 御遺文百廿余編(脚註入)

体裁 裝幀

卷頭挿入クワイムアート寫眞版七葉
四六版 縦六寸二分 横三寸五分

紙數 千百十四頁

特製 總 皮 三方金

並製 總 クロース 天 金

函入最上美本

定價 特製 三圓八十錢
並製 二圓八十錢

送料 廿一錢

御義口傳
御講聞書
妙行要文集
一日一訓
聖語字解

發行所

久

遠

閣

東京市日本橋區江戸橋二ノ六(明正ビル)

電話 日本橋 三二七番
番付 日本橋 二八〇六番

日本ポスター揭示株式會社

東京市京橋區銀座五丁目四番地
七寶ビル内(舊尾張町交叉點前)
電話銀座(57)三三三一 一番

御葬式なら博善社

日暮里町火葬場 電話下谷(87)三八一七三	落合支社 電話大塚(81)三七四七	代々橋支社 電話西谷(39)六〇二	桐ヶ谷支社 電話西谷(44)二〇三	砂村支社 電話本郷(75)六六七	四ツ木支社 電話本郷(75)二〇三
御贈り花と	御贈り花と	御贈り花と	御贈り花と	御贈り花と	御贈り花と
博善社 本社(鎌倉河岸) 電話神田(25)三〇七〇 三〇七二	博善社 本社(鎌倉河岸) 電話神田(25)三〇七〇 三〇七二	博善社 本社(鎌倉河岸) 電話神田(25)三〇七〇 三〇七二	博善社 本社(鎌倉河岸) 電話神田(25)三〇七〇 三〇七二	博善社 本社(鎌倉河岸) 電話神田(25)三〇七〇 三〇七二	博善社 本社(鎌倉河岸) 電話神田(25)三〇七〇 三〇七二
赤坂見附支店 電話青山(36)五六五九香	大森驛前支店 電話大森(〇)六八三香	大森驛前支店 電話大森(〇)六八三香	大森驛前支店 電話大森(〇)六八三香	大森驛前支店 電話大森(〇)六八三香	大森驛前支店 電話大森(〇)六八三香

價廉、切親、寧丁、速迅

生花、造花も博善社

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	全	金壹圓八拾錢
日蓮主義本領	全	送料共	全	金貳圓拾錢
法華經要義	歸天覽	全	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	全	全	全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	全	全	全	金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值	全	全	全	金貳拾五錢
法華經要品	全	全	全	金五拾錢
日生上人レコード	全	全	全	金參圓廿五錢
礦部滿事謹輯	全	全	全	金壹圓七拾錢
本多日生上人	全	全	全	金拾錢
動行作法	全	全	全	金拾錢

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

月刊「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六ノ一七

發行所

振替東京一〇九四〇番

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人 統一出版部
振替東京九四〇番

發行所	東京市小石川區音羽町六ノ一七
電話	電話牛込五三三六番 振替東京九四〇番
印刷所	都印刷所 電話高輪六〇二四番
編輯人	磯部滿事
印刷人	鈴木日雄
發行所	財團法人統一團
電話	電話牛込五三三六番 振替東京九四〇番

注意
昭和十年二月廿四日 印刷納本
昭和十年三月一日 發行
(第四百八十號)

複製許不



統

一

法華八國統一團發行

發行

次 目

釋尊の降誕を慶祝して(其一).....	日 生 上 人
日蓮教學講座(第十八回).....	河 合 陟 明
女性美の極致.....	中 邑 喜 根 子
法華經講話(第十六講).....	小 林 一 郎
記 事	
○各地教信 ○寄附團費誌料領收	

號月四年十四第